

AICHI SANGYO UNIVERSITY

造形学研究所長・教授 新井 勇治

平成19年7月、文部科学省は「大学設置基準等の一部を改正する省令」を公布し、いわゆる「人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的の明確化」を求めました。学位の課程を中心とする考え方にに基づき「学士課程教育」が大学教育のあるべき姿であると規定し、学生本位の教育活動の展開が必要であると指摘しています。

本学では、学園建学の精神に基づいて、学部、大学院の教育研究上の目的を以下のとおりとしています。

造形学部

産業・地域・生活における建築及びデザインという造形行為を通して、社会に貢献できる人材を育成する。

大学院造形学研究科

人間の生活に不可欠な造形活動を、生活を包み容れる建築空間を創り出す「社会造形」と、日常行為を支える用具や生活様式を提案する「生活造形」の面から深く探求し、これらの実務に携わる、高度な倫理観と知識・技能を併せもった実践的な職業人の育成を目的とする。

我が国の大学教育の新しい潮流のなかで、改めて大学が本来果たすべき役割としての教育、研究、地域貢献(学校教育法第83条)をふまえれば、本造形学研究所が目指すべき活動は、上記の教育研究上の目的を達成するために、学生の視点にたった造形教育を実践するための教授法の開発研究、研究所員の活発な研究の推進、教育研究の成果の社会提供、という3つの大きな柱で構成されるべきこととなります。

本研究所は、建築とデザインの分野における造形を幅広く研究する大学附設機関としての日頃の活動をまとめ、学部及び大学院の教育研究の成果を広く社会に提供するため、毎年所報を発行しており、本年度も第21号を発行する運びとなりました。より良い造形学の教育研究を実践していくため、各界のご指導・ご批判を頂きますようお願い申し上げます。

目次

第21号の刊行に際して

研究活動

研究作品

伊藤 潤一 Junichi ITOH (通信教育部建築学科)
影ミチル蔵

伊藤 潤一 Junichi ITOH (通信教育部建築学科)
LAUNDRY SHOP | アキバクリーニング

岩田 政己 Masami IWATA (造形学部スマートデザイン学科)
2024 岩政展

藤枝 秀樹 Hideki FUJIEDA (通信教育部建築学科)
空と繋がる切れ目のないライン状トップライトのディテール

松浦 主税 Chikara MATSUURA (造形学部スマートデザイン学科)
「徊機惶」, 「騒銀瞬鱗」

森 理恵 Rie MORI (造形学部スマートデザイン学科)
国産木材を活用した古着回収ボックス

森本 達也 Tatsuya MORIMOTO (造形学部建築学科)
木材の魅力を発信するワークショップ『木の特徴を感じながらミニカスタネットをつくろう!』

研究論文

杉山 奈生子 SUGIYAMA Naoko
クロード・ジロー、アントワヌ・ヴァトーの絵画と舞台芸術の相関性
——雅宴画とオペラ=バレエの誕生——1

竹内 孝治 TAKEUCHI Khoji ・ 瀬川 朗 Akira SEGAWA
戦後教育改革期の小中学校検定教科書にみられる「住宅」単元の掲載状況
——算数・数学科, 理科, 社会科を対象として——5

竹内 孝治 TAKEUCHI Khoji ・ 森本 達也 Tatsuya MORIMOTO
工業デザイナー・秋岡芳夫のものづくり思想にみられる住まい観12

堀越 哲美 HORIKOSHI Tetumi
日本の都市における四季期間の変化に関する研究19

教育活動

2024 年 造形学部 教育活動報告

2024 年度度 科学研究費補助金・競争的研究資金 取得研究一覧

造形学研究所の活動について

研究活動
研究 作品

伊藤潤一

影ミチル蔵

東京郊外に建つ、築100年以上経つ蔵の保存改修計画である。

構造躯体と屋根・外壁を保存し、建具・内装を改修した。

1階は農機具などの収納庫、2階は書類などの保管と書斎としても利用できる。

2階床を解体してパンチングメタル床を張り、空気の流動性をつくり出した。

入口扉は、溶融亜鉛メッキ+リン酸亜鉛皮膜処理によって古建築との風合いの調和を図った。

保存された木部は丁寧に1本1本空拭きし、朽ちている部分は継木を施した。

点描画の空間に埋没する

光と影に満たされたこの空間は、自分は光を見ているのか、影を見ているのか。

まるでジョルジュ・スーラ、ポール・シャニックのような点描画の空間に埋没した錯覚に陥る。

■建築データ

所在地 東京都江戸川区

用途 倉庫(蔵)

工事種別 改修工事

構造 木造

基礎 ベタ基礎

階数 地上2階

建築面積 19.87㎡ (6.01坪)

延床面積 38.08㎡ (11.52坪)

1階 19.87㎡

2階 18.21㎡

仕上げ

床 / 1F: 既存土間コンクリートの上、

モルタル金ゴテ+カラクリート仕上げ

2F: パンチングメタル t=6mm 焼付塗装

壁 / 漆喰塗り

天井 / 既存残し

階段 / パンチングメタル t=6mm 焼付塗装

棚 / パンチングメタル t=6mm 焼付塗装

開口部 / パンチングメタル t=3mm 焼付塗装

鋼製建具 / スチールドア

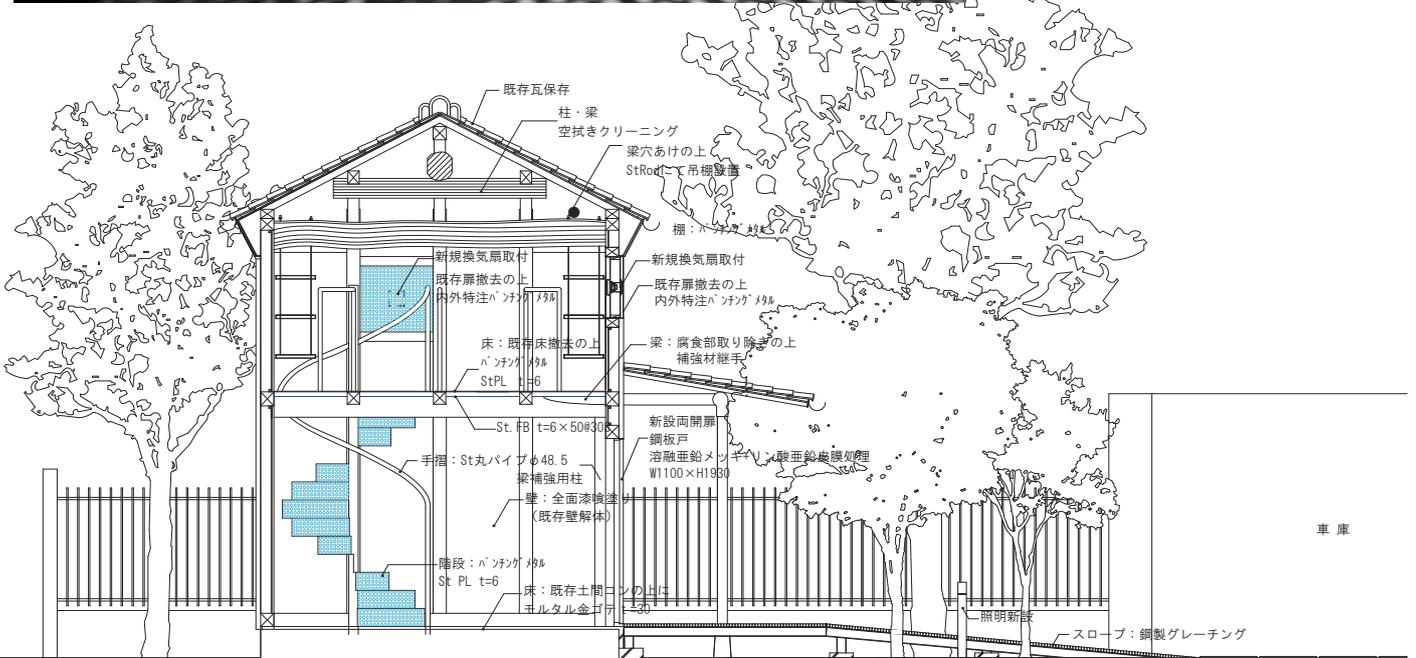
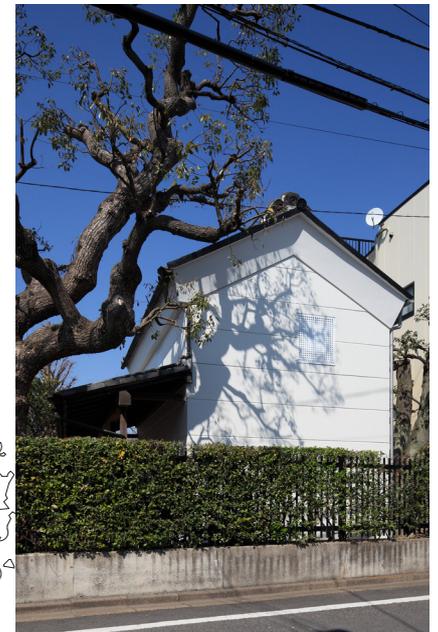
溶融亜鉛メッキ+リン酸亜鉛皮膜処理

外部アプローチ / 鋼製グレーチング

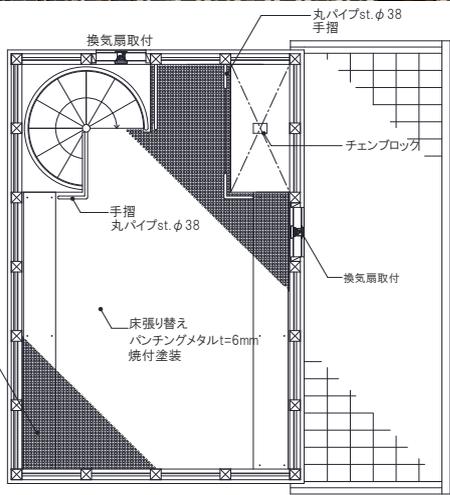
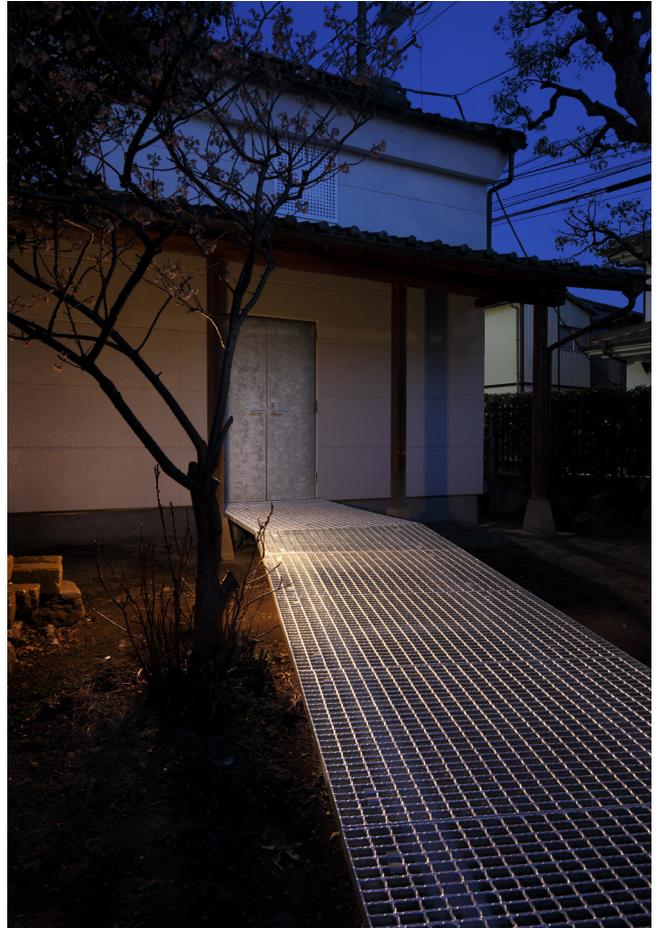
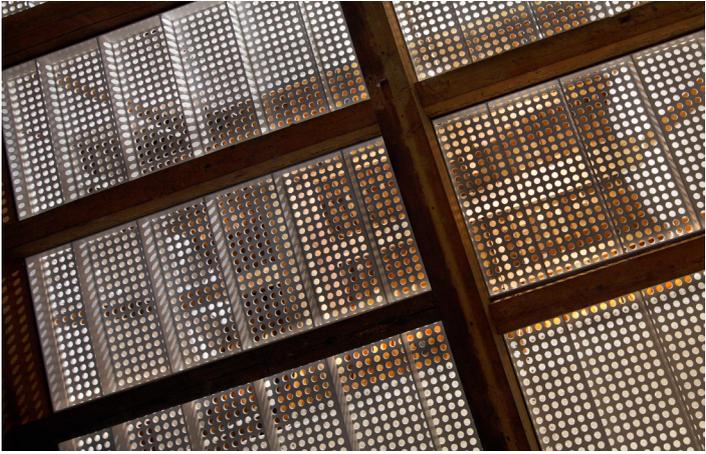


改修前

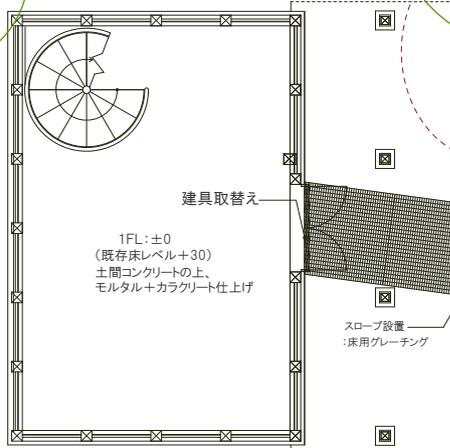
改修前



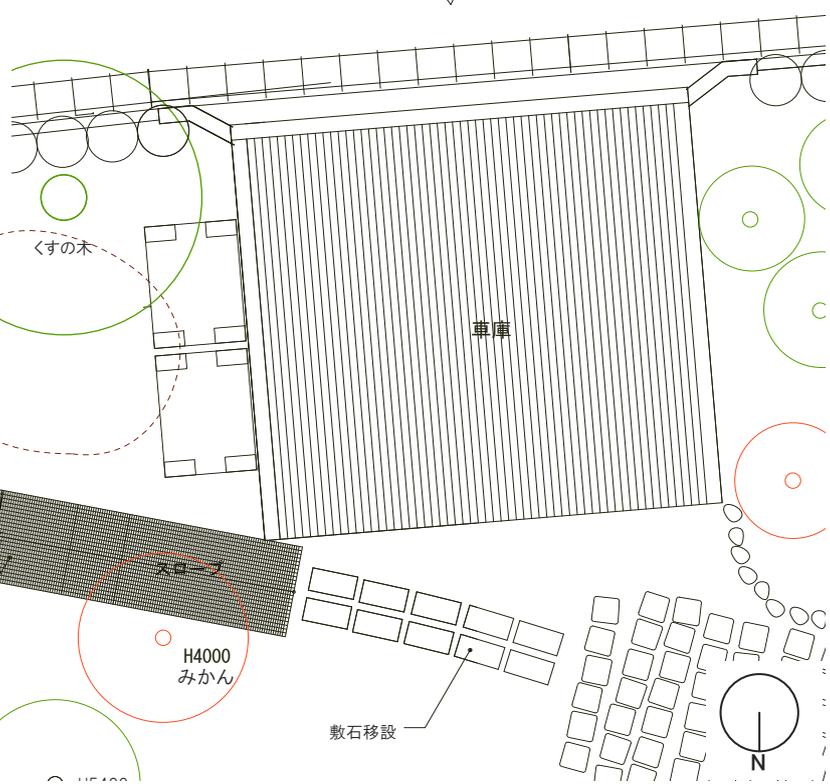
断面図 S=1/80



2F 平面図 S=1/100



1F 平面図 S=1/100



伊藤潤一

LAUNDRY SHOP | アキバクリーニング

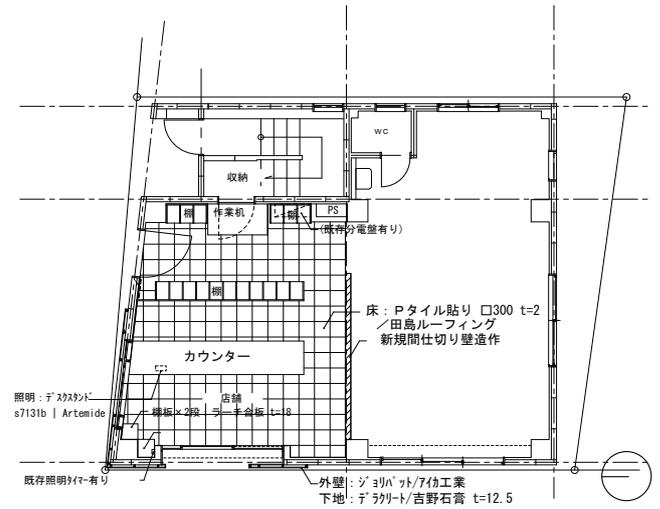
東京江戸川区の老朽化したビルの上階にあるクリーニングショップの改修計画である。無駄な装飾や色彩を排除し、アイロン型をエントランスゲート、窓、掲示パネルなどのデザインアイコンとした。室内はラワン材で統一し、落ち着きのあるインテリア空間となっている。また、店舗名などのサインを真鍮で作成した。店舗のマークも設計者が自らデザインしたものである。夜になると室内に明かりが漏れ、アイロン型が街の歩道空間に象徴的に浮かび上がる。

■ 建築データ

所在地 東京都江戸川区
用途 店舗
工事種別 改修工事

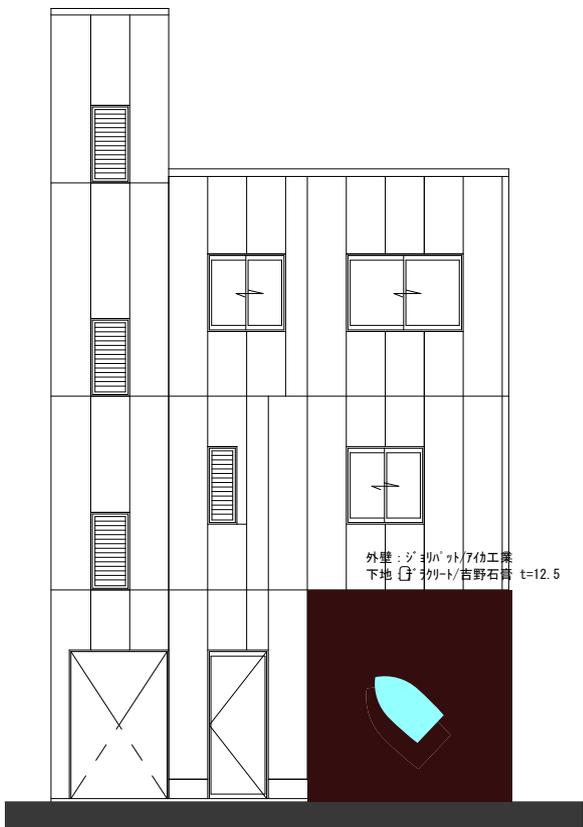
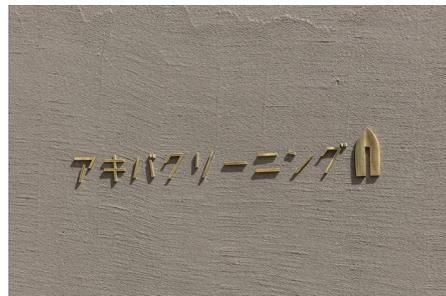
階数 地上3階（1階店舗部のみ改修）
建築面積 21.44㎡（店舗部のみ）
延床面積 21.44㎡（店舗部のみ）

仕上げ
床 / 1F: 既存土間コンクリートの上、
300□Pタイル
壁 / ラーチ合板
天井 / ラーチ合板
棚 / ラーチ合板 t=18mm
開口部 / 既存アルミサッシ
外壁 / 塗壁

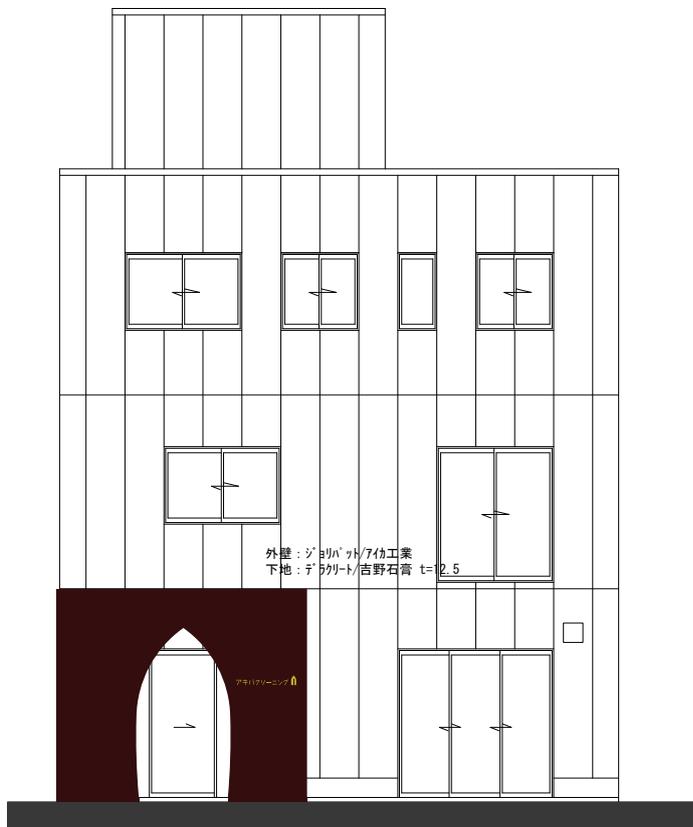


平面図 S=1/150





北側立面図



西側立面図

2024 岩田政巳

○夏山小学校 鬼面制作指導

開校150周年記念事業として、図画工作の1学期の週1コマを8週使い指導。1年から6年の全校児童25人参加。



鬼とは何かの話



かぶると生き物



変身する楽しさ



私の作例と比べる



講評会



ベースが同じホワイトマスクに見えない成形と様々な色使いを指導。
裏表に防水塗料を3回塗って野外展示に備える。
(写真は、なつやま通信「赤い屋根」より転写)

○おかざきっ子展に出品、及び小学校校舎内に常設展示



2024/10/19 土、20日 岡崎市中央総合公園にて岡崎市の全小中学生の作品展に、夏山小学校として鬼面を出品。搬入、施工、展示を担当。

校舎入り口のロビーの壁の上の方に常設展時。展示作業を担当。

○陶板モニュメントの木製の額を制作



9/10 開校150周年記念モニュメント完成



開校150周年記念として児童が作った陶板を展示するための木製の額を制作。校舎内に額装して展示。
(写真は、なつやま通信「赤い屋根」より転写)

○2024 岩政展

2024/10/12 土、13日 大人原山祭にて作品展示と販売。



2024 岩政展 即売会
子供の木製コップを販売・贈答します。
『アプハラスターの150周年』
10/12、13 大人原山祭



空と繋がる切れ目ないライン状トップライトのディテール

Details of a seamless linear skylight that connects with the sky.

美馬西部共立火葬場「せせらぎの風」
床面積：1693.56㎡

藤枝 秀樹

建物が位置する場所は剣山の麓、清流「貞光川」が吉野川に合流する地点にある。剣山と吉野川を結ぶ軸に野辺の送り空間(写真1)を通し、剣山の緑の景色と水辺の雄大な景観を繋げていることを意識する「空の景色を連続させたトップライト」をデザインした。トップライトは、切妻屋根・軒(図2・写真3)や妻軒・妻壁(図1・写真2)を含め全てガラスで覆われ、切れもなく空の景色が内部から外部へと連続するディテールとなっている。



写真1：野辺の送り空間（エントランスホール）



廻機惶 (かいきこう) 1500×750mm 第79回春の院展 (2024)



騒銀瞬鱗 (そうぎんしゅんりん) 1750×2200mm 再興第109回院展入選 (2024)

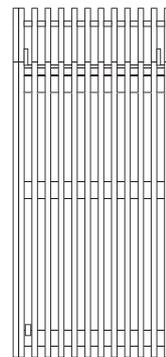
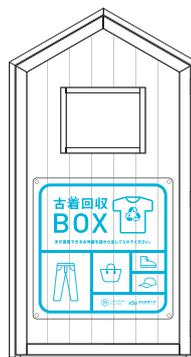
森 理恵

国産木材を活用した屋内用古着回収ボックス設計および制作

令和4年7月から岡崎市の古着リサイクル事業者と協力し、三河地方の間伐材を活用した古着回収ボックスの共同開発を進めている。

令和5年2月には、市民から直接古着を回収するため、生活に密着した小売店2箇所に試験的に古着回収ボックスを設置し、回収を実施した。設置期間中は、一度に大量の古着を持ち込む市民が多く、投入口から古着があふれる状況が発生した。このことから、回収ボックスの大きさに課題があることが明らかとなった。

そこで、カゴ車が収容可能な大型の屋内用古着回収ボックスを制作し、令和6年10月より、岡崎市内の小売店3箇所（アピタ岡崎北店、ピアゴ洞店、ピアゴ上和田店）に設置し、回収を実施している。今後は、岡崎市内において間伐材を活用した古着回収ボックスの増設を進めていく計画である。



サイズ：W1020 D850 H1910 素材：三河桧、針葉樹合板、金具



森本 達也

木材の魅力を発信するワークショップ 『木の特徴を感じながらミニカスタネットをつくろう！』



世界には6万種以上の木が生息する。木材は、私たちの生活の中で最も身近な素材の一つであり、認知度の高い木材といえば「スギ」と「ヒノキ」が代表種として挙げられる。これらはどれもヒノキ科に属する木材であり、性質や特徴については近似種であると言える。しかし、世界に存在する木材は、木目・色・手触り・重さ・匂いなど多種多様なものがある。本ワークショップでは、日常で触れる機会が乏しい多種多様な木材に触れる機会を参加者に提供する。ミニカスタネットを制作する過程で、参加者は視覚・聴覚・嗅覚・触覚を使い、木材の新たな魅力を発見することができる。本ワークショップは、木工やものづくりの体験を通して、木材の更なる魅力を発信することを目的とする。

ワークショップ工程

まず、10種の樹種ごとに制作した完成品のカスタネットを手に取り、音色・色・手触り・重さ・匂いなどの違いを感じながら使用する樹種を選択する。サンプルとして用意したカスタネットは、二枚のパーツが同種の木材で制作してある。そのため、個々のカスタネットの音色は、樹種の特徴を表す。参加者は、二枚のパーツを同一種もしくは他種の組み合わせで制作する。



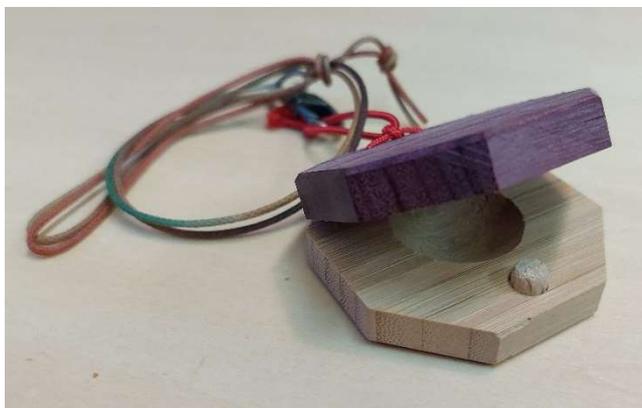
他種の組み合わせの場合は、2種の木材の特徴が組み合わされた音色となり、サンプルで体験した10種の音色とは異なることが予想されるが、その音色は完成してからのお楽しみである。二枚のパーツの片方には、「ボール盤」を使用して突起部パーツを固定するための穴を加工する。多くの参加者にとって、電動工具を使用した加工は初の体験であり、印象に残る作業となる。

参加者は、匂いや手触りなどの木材の特徴についての新たな発見を制作過程のなかで体験し、その思い出をオリジナルカスタネットと一緒に持ち帰ることができる。



2023年7月14日に兵庫県丹波市立植野記念美術館にて開催された丹波市ゆかりの作家による合同イベント

『きて・みて・あそんで！うえびでピクニック』大人も子どもも！うえびワークショップ・フェア』にて



研究活動
研究論文

クロード・ジロー、アントワヌ・ヴァトーの絵画と舞台芸術の相関性

雅宴画とオペラ=バレエの誕生

A study on the correlation between paintings of Watteau and Gillot and performing arts

About the creation of the *fête galante* and *Opéra-Ballet*

杉山 奈生子*

Naoko SUGIYAMA

This paper focuses on the presence of Claude Gillot (1673-1722), who was a mentor to Jean Antoine Watteau(1684-1721), and reaffirms the similarity in aesthetics between Gillot's and Watteau's paintings and the performing arts of the time, while also considering the correlation in their creations.

Keywords : 18th century France, Claude Gillot, Jean Antoine Watteau, *fête galante*, Court Ballet, *Opéra-Ballet*

18世紀フランス, クロード・ジロー, ジャン=アントワヌ・ヴァトー, 雅宴画, 宮廷バレエ, オペラ=バレエ

1. はじめに

フランスにおいては、17世紀の公的なプロパガンダを目的とした絢爛豪華で重厚なバロック芸術が、18世紀には私的な愛好のための優雅で軽快なロココ芸術に取って代わられる。これは、18世紀初頭から、美術、音楽、演劇、バレエ等の分野で、様々な新興のジャンルが誕生したことからも理解されるが、とりわけ、美術におけるジャン=アントワヌ・ヴァトー (Jean Antoine Watteau, 1684-1721) が創始した雅宴画のジャンルは、18世紀中盤に隆盛を極めるロココ芸術に大きな影響を与えた点で重要である。

太陽王と呼ばれたルイ 14 世 (1638-1715, 在位 1643-1715) は、フランス国王としての絶対的な権力を誇示するために、宮廷バレエの主演として華麗に踊り、居城であるヴェルサイユ宮殿では、王を賛美するバロック音楽が演奏され、太陽神アポロンに自らを見立てた神話画や威厳に満ちた彼の肖像画が随所に飾られた。このようなバロック的な芸術が、17世紀後半に流行したが、ルイ 14 世が崩御した 1715 年を前後として、ロココ芸術が台頭する。

絵画では、ヴァトーがフランス王立絵画彫刻アカデミーへ《シテール島の巡礼》(図 1) を入会作品として提出したことを契機として、雅宴画 (*fête galante*) と称され

る新しい画題のジャンルが登場する。ヴァトーの雅宴画には、当世風の貴族達が宮殿や庭園に集いながらも、それまでのヴェルサイユ宮殿で練り広げられた公的かつ儀礼的な様相は息をひそめ、親密な愉しみとしての舞踏や散歩、会話や恋愛に興じる情景が描かれる。また、舞台芸術では、17世紀後半にはヴェルサイユ宮殿で国王の政治的プロパガンダのための宮廷バレエが上演されたが、18世紀には、活動の拠点がパリに移り、パリ・オペラ座で貴族やブルジョワの個人的な愛好のためのオペラ=バレエが登場した¹⁾。

これまでに、筆者はヴァトーの雅宴画とオペラ=バレエが当時の文化的社会的文脈の中から創成され、同質の美学を有することを指摘してきた²⁾。本稿では、ヴァトーが師事したクロード・ジロー (Claude Gillot, 1673-1722) の存在に着目し、ヴァトーの絵画と当時の舞台芸術の美学の同質性について改めて確認するとともに、両者の創作における相関性について考察する。

2. クロード・ジローと舞台芸術

クロード・ジローは、ヴァトーが師事した画家として知られるが、近年開催された初の回顧展、「クロード・ジロー (1673-1722) ~喜劇、寓話、アラベスク」では、舞台衣装や舞台装飾のデザイン、寓話の挿絵、パリ・オペラ

*愛知産業大学大学院造形学研究所 教授・博士 (文学) Prof., Dept. of Design, Faculty of Architecture and Design, Aichi Sangyo Univ., Ph. D.



図1 ジャン＝アントワーヌ・ヴァトー《シテール島の巡礼》1717年、油彩／カンヴァス、パリ、ルーヴル美術館（2024年5月筆者撮影）

座での上演作品集の挿絵など、素描を中心に展示され、素描家としての優れた資質が再評価されている。この展覧会は、当初は、2023年11月からパリのルーヴル美術館で開始されたものの、漏水によりわずか数日で終了となり、2024年3月からディジョンのマニャン美術館へと会場を移して開催された（図2）³。筆者が2024年5月に現地の展覧会場で調査した知見も踏まえながら、ジローと舞台芸術との関係性を記述する。



図2 マニャン美術館正面（2024年5月筆者撮影）

ジローがパリ・オペラ座で仕事をしていたことに関する資料はほとんど残されていないが、1712年、スウェーデンのバロック建築家ダニエル・クロンストレム（Daniel Cronström, 1655-1719）が、同郷の建築家ニコデム・テッサン（Nicodème Tessin, 1654-1728）に宛てた手紙の中で、ジローは「装飾、装置、衣装（décoration, machines et habits）」に従事していると記述している⁴。ジローは、ジャン・ベラン1世（Jean I Berain, 1640-1711）の下で1704年頃から働き始め、続いて息子のジャン・ベラン2世（Jean II Berain, 1674-1726）の下でも従事した。

1721年のオペラ＝バレエの作品『*Les Éléments*』では、若き日のルイ15世が舞踏を披露しているが、ジローは、その時の舞台衣装のデザインを担当し、素描家としての

類まれなる才能を発揮している（図3）。



図3 クロード・ジロー《オペラ＝バレエ（*Les Éléments*）のための4つの衣装デザイン》1718-1720頃、サンギーヌ・水彩／紙、パリ、ルーヴル美術館（2024年5月筆者撮影）

オペラ＝バレエの登場は、1697年、アントワーヌ・ウーダール・ド・ラ・モット（Antoine Houdart de La Mott, 1671-1731）による《優雅なヨーロッパ（*Europe galante*）》の上演まで遡る。17世紀のヴェルサイユ宮殿では、ジャン＝バティスト・リュリ（Jean-Baptiste [de] Lully, 1632-1687）の楽曲に代表される伝統的な宮廷バレエが上演されていたが、17世紀末から18世紀にかけて、ラ・モットに代表される前衛的なオペラ＝バレエが上演されるようになる。

ラ・モットが『ヴェネツィアの娘（*La Vénitienne*）』を発表した1705年頃は、前衛的なオペラ＝バレエとともに、伝統的なバロック音楽や宮廷バレエもパリのオペラ座で上演されていた。そのため、ジローは、バロック音楽のリュリによる楽曲本『テセウス（*Thésée*）』（1711年）に挿絵（図4,5）を描く一方で、新しいジャンルのオペラ＝バレエ『*Les Éléments*』（1721年）では、舞台衣装のデザイン画（図3）を担当している。オペラ座では、伝統的な楽曲も18世紀を通して上演されていたため、オペラ座の仕事として新旧の様式の作品にジローも柔軟に対応していたと言える。



図4



図 5

図 4.5 クロード・ジロー《ジャン＝バティスト・リュリ作曲『テセウス』の譜本挿絵：第3,5幕》1711年、版画、パリ、フランス国立図書館（図4筆者撮影）

3. アントワーヌ・ヴァトーと舞台芸術

続いてヴァトーと舞台芸術の関係性について記述するが、その上で、彼が師事したジローの存在は欠かせない。ヴァトーは、1702年頃、故郷のヴァランシエンヌからパリに赴き、ノートルダム橋の工房で北方絵画の模写や、クロード・オードラン3世（Claude Audran III, 1658-1734）の下で室内装飾のデザインを手がけた後、ジローと師弟関係になる。ジローは、デザイナーとして、パリ・オペラ座で舞台装飾や衣装のデザイン等で活動すると同時に、画家として、喜劇の場面を描いた芝居絵で名を馳せていた。

ジローの影響を受けて、ヴァトーは、フランス喜劇、イタリア喜劇、緑日芝居など、様々な舞台芸術に触れ、関連する絵画や素描を制作している。1707-1709年頃には、ヴァトーはジローと協働して、《喜劇、月の皇帝アルルカン》の一場面を扱った芝居絵（図6）を制作している。ヴァトー単独としては、1707-1708年頃の芝居役者の素描（図7）、喜劇役者達が自然の風景の中で憩う情景を描いた芝居絵（図8）等が挙げられる。



図 6 クロード・ジロー、ジャン＝アントワーヌ・ヴァトー《月の皇帝アルルカン》1707-1709年頃、油彩／カンヴァス、ナント美術館



図 7 ジャン＝アントワーヌ・ヴァトー《医者に扮した役者の3つの習作》1707-1708年、サンギーヌ／紙、ヴァランシエンヌ美術館



図 8 ジャン＝アントワーヌ・ヴァトー《ご機嫌なピエロ》1712-1713年？ 油彩／カンヴァス、マドリッド、テイッセン・ボルネミッサ美術館

また、パリで最も格式の高い劇場であったパリ・オペラ座には、そこで様々な制作活動をしていたジローの弟子として出入りし、ヴァトーは、伝統的なオペラ、宮廷バレエとともに新進のオペラ＝バレエを実見していたであろう⁵。そして、『シテール島の巡礼』は、ヴァトーの雅宴画の創始となった作品（図1）の主題であるが、この神話的題材を扱った舞台芸術として、1697年から1716年までに9つの作品（オペラ＝バレエもしくはコメディ＝バレエ）が上演されている。これらは、ヴァトーを取り巻く重要な文化的コンテクストとして存在している。

ミシェル・ド・ラパール作曲／ウーダール・ドゥ・ラ・モット作詞のコメディ＝バレエ『ヴェネツィアの娘』（1705年）とトマ＝ルイ・ブルジョワの『変装したアムールたち』（1713年）は、ヴァトーの《シテール島》と《シテール島への巡礼》（図1）の着想源としてすでに指摘されている。当時、オペラ＝バレエをヴァトーの雅宴画、宮廷バレエを古典主義的なラファエロやミケランジェロの絵画に例えた記述があるように、ヴァトーの雅宴画は、従来の伝統的な宮廷バレエではなく、新進のオ

ペラ＝バレエの世界観と相関関係にある。

作曲家ジャン＝フィリップ・ラモー (Jean-Philippe Rameau, 1683-1764) の多くの歌劇に台本作者として関わった、ルイ・ド・カイユザック (Louis de Cahusac, 1706-1759) は、18世紀と17世紀における新旧のバレエに関する論考を記している⁶。その省察の中で彼は、17世紀のキノーが創案したオペラは、イタリア・ルネサンスの巨匠ミケランジェロやラファエロの素描に基づく壮大な構成の絵画に譬えられる一方で、18世紀のラ・モットが創り出したスペクタクルは、ロココの画家、ヴァトーの軽やかで繊細な線描や明るい色彩から創られる瀟洒で優雅なミニチュール (細密画) のようであると述べている⁷。

4. おわりに

18世紀前半のフランスにおける美術界と音楽・演劇・バレエ界の有機的な関係性について、ジローとヴァトーの喜劇を題材とした芝居絵や素描、ジローのオペラ＝バレエの衣装デザインおよびオペラの楽曲集の挿絵を提示することで浮き彫りにした。その他にも、ヴァトーの友人である画家ニコラ・ランクレ (Nicolas Lancret, 1690-1743) は、当時、人気を博したバレリーナの肖像画 (図9) や、ヴァトーのパトロンであるクロザの邸宅でのコンサートの情景を描いており、音楽や演劇、バレエ等の舞台芸術がヴァトーやジロー等の美術家にとって身近な芸術であり、画題やモチーフ、造形的な創造の着想源として看過できない存在であった。

そして、オペラ＝バレエと雅宴画は、新たな世相や風俗、文化的思潮を汲み取り、多くの主題やモチーフを共有していく。例えば、17世紀バロックで持て囃された神話の神々や英雄、物語や歴史の中の古代の人々は姿を潜め、恋愛的主題が推奨され、当世風の優雅な紳士淑女達が、戸外の庭園を舞台として、音楽や舞踊、散歩や祝宴といった遊興の場面に登場することとなる。神話的題材は、オペラ＝バレエではダンサーとして、ヴァトーの雅宴画では彫刻モチーフとして登場する (図10)。

注

¹ Sarah R. Cohen, *Art, Dance, and the Body in French Culture of the Ancien Régime*, Cambridge, 2000; Georgia Cowart, Watteau's "Pilgrimage to Cythera" and the Subversive Utopia of the Opera-Ballet, *Art Bulletin*, vol.83, no.3, Sep., 2001, pp.461-478; James Johnson, *Listening in Paris: A Cultural History*, Berkeley, University of California Press, 1995; Arianne Ducrot, "Les représentations de l'Académie de Musique au temps de Louis XIV," *Recherches sur la Musique Française Classique*, 10, 1970, pp.19-55; Jérôme de la Gorce, "Opera et son public au temps de Louis XIV," *The Garland Library of the History of Western Music*, New York, Garland, 11, 1986, pp.27-46; John Lough, *Paris Theater Audiences in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*, London, Oxford University Press, 1957. バリ・オペラ座の歴史を本格的に紹介した次の展覧会目録も参照。『パリ・オペラ座～響き合う芸術の殿堂』(展覧会図録)、アーティゾン美術館、2022年。

² 杉山奈生子「ロココ絵画に描かれた彫像の生動性～信仰から愛好の対象へ」『聖性の物質性～人類学と美術史の交わる場所』(木俣元一



図9 ニコラ・ランクレ《踊るマリー・カマルゴ》1730年、カンヴァス/油彩、サンクトペテルブルク、エルミターージュ美術館



図10 ジャン＝アントワーヌ・ヴァトー《恋の喜び》1717-1718年、油彩/カンヴァス、ドレスデン、国立絵画館

17世紀には、ユピテルやアポロのような雄々しい神々、リナルドのような軍事的な英雄は、君主の権力を誇示するような存在であったが、18世紀には、愛の女神とその息子であるウェヌスとクピド、快楽主義の神であるバックス、風刺や皮肉の神であるモーモス、女道化、喜劇の女神であるフォリーが取って代わる。新興の舞台芸術であったオペラ＝バレエ、新しいジャンルとして18世紀に創始された雅宴画は、17世紀の公的なプロバガンダのための芸術に代わり、私的な愛好のために求められた芸術であり、お互いに同質の美学を有していると言えよう。

編)、三元社、2022年、266-292頁；杉山奈生子「18世紀フランスにおけるピュグマリオン神話の受容～オペラ＝バレエとヴァトーの雅宴画を巡って」『造形学研究所報』第19号、2023年、23-29頁。

³ Hélène Meyer, Xavier Salomon, Jennifer Tonkovich, *Claude Gillot (1673-1722). Comédies, fables et arabesques* (exh.cat.), musée du Louvre, Paris, 2023.

⁴ Cf. "L'Opéra," *op.cit.*, pp.104-105.

⁵ Jérôme de la Gorce, "Watteau a l'Opéra (1702)?" François Moureau/Margaret Morgan Grasselli (éds.), *Antoine Watteau (1684-1721), le peintre, son temps et sa légende* (Actes du colloque international, Paris, October, 1984), Paris/Genève, 1987, p.11.

⁶ Louis de Cahusac, *La danse ancienne et modern, ou Traité historique de la danse*, The Hague, Jean Neaulme, 1754.

⁷ Cowart, *art.cit.*, pp.461-462.

[本稿は、令和3-6年度科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号21K00177(研究代表者：杉山奈生子)による研究成果の一部である。]

戦後教育改革期の小中学校検定教科書にみられる「住宅」単元の掲載状況

算数・数学科, 理科, 社会科を対象として

Overview of the Units of Housing in Elementary and Junior High School Textbooks During the Early 1950s

Focusing on Mathematics, Science and Social studies

竹内 孝治*, 瀬川 朗**

Kohji TAKEUCHI, Akira SEGAWA

Keywords: *Experience Unit Learning, Life Experiences, Problem Solving, Housing*

Units of Housing, Housing Education

生活単元学習, 生活経験, 問題解決, 住宅, 「住宅」単元, 住教育

1. 背景と目的

本研究の目的は、戦後教育改革期の学校教育において、生活単元学習の題材としてしばしば取り上げられた「住居」や「住生活」が、どのような教科・単元で扱われていたのかを整理して教科間の連携がどのように図られていたのか、そしてどのようにそれらが解消されていったのかを検討し、その結果を踏まえて、現在の住生活教育における教科横断型の「住宅」単元の可能性を模索する研究視座のもと、その前提作業として戦後教育改革期の小中学校検定教科書にみられる「住宅」単元の掲載状況を悉皆的に把握することである。

住生活教育を「住居や住生活に関する基本的な知識を身につけ、将来の地域社会の主体としての意識を育てる教育」ととらえれば、現在の学校教育における住生活教育は、主として家庭科を中心として実践されており、家庭科以外の教科での取り扱いは限定的である。それゆえより多面的な観点から学習を進めるため、教科横断型のカリキュラムへと発展・拡張することが求められている。

このように、現在では住生活教育は家庭科を中心として実践されているが、戦後教育改革期の生活単元学習に目を向けると、戦災からの復興の途上に国民が直面していた深刻な住宅難・住宅問題を踏まえた学習内容が家庭科だけでなく、社会科・数学科・理科・図画工作科など多様な教科に含まれていたことが確認できる。日常生活に問題解決の題材を求めた生活単元学習にとって、「住宅」は最適なテーマであったものと思われる。

しかしながら既往研究では、各教科教育史の文脈において戦後教育改革期における住生活教育の内容が別個に検討されてはいるものの、各教科がどのように連絡しており、その後の系統主義への転換の潮流のなかでどのように縮小・整理されていったのか、また建築学や住居学など同時代の住生活関連言説からの影響が教科によりどのように異なっていたのかが未解明であるという問題点がある。

例えば、小・中学校の旧図画工作科においては製図に関する単元等で住宅が取り扱われており、その後技術・家庭科へと移行したとされているが、学習指導要領等の公的カリキュラムのレベルでの研究はともかく、教科書レベルで具体的にどのように継承されたのかについて検討した研究は僅少である。児童・生徒の生活を「コア」として教育課程を編成する試みであったコア・カリキュラム運動に関する研究でも、例えば「寒地住宅」のように住宅を主題としたものが存在したことは示されているが、各教科において「住宅」をどのような観点から取り扱い、そしてそれらをどのように統合しようとしていたのかは未検討のままである。

以上のように、通教科的な住生活教育史研究の不足が課題であり、本研究において戦後教育改革期の教科書およびカリキュラム資料をもとに、住生活がどのように教材化されていたのかを探求し、過去の実践に示唆を得ながら今後の教科横断型の「住宅」単元の可能性を模索することには一定の意義があるといえる。

* 愛知産業大学造形学部建築学科 准教授・修士 (建築学) Associate Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Architecture and Design, Aichi Sangyo Univ., M.Arch.

** 鹿児島大学学術研究院法文教育学域教育学系 講師・博士 Lecturer, Dept. of Home Economics Education, Faculty of Education, Kagoshima Univ., Dr.Edu. (教育学)

2. 既往研究と本研究の位置づけ

戦後教育改革期において社会科・数学科・理科・図画工作科など多様な教科で「住宅」が扱われてきたことは、教科教育史研究、とくに住生活教育史研究すでに明らかにされている。

まず、数学科について、蒔苗^{1~3)}は文部省著作教科書『中学生の数学』(1949)の第I単元が「単元学習の『生活単元』を代表するもの」として、『中学生の数学』は住居の構造や居住環境の安全と衛生など、住生活の文脈から問題を抽出して数学的に定式化したうえで問題を解決するという流れに沿って、直線や平面の位置関係や、円錐などの立体図形に関する数学的概念を学習することが目指された教科書であったと評価している。

筆者らは上述の1949年発行の中学校数学科教科書『日常の数学』に登場する単元「私たちの住居」の執筆者らが、理科や家庭科とのいった住生活を扱う他教科を意識しながら、数学科で住生活を扱うことの独自性を見出そうと試みたことを明らかにした⁴⁾。加えて、『中学生の数学』をモデルとして執筆された教科書教科書のひとつである『日常の数学』(1950)に設けられた単元「私たちの住居」では「終戦後の住宅事情を踏まえて、住生活に関する問題を解決する」という物語のなかで数学的知識を習得することが目指されており、「住宅」を社会問題として扱う視点が含まれていることを明らかにしてきた⁵⁾。

次に、社会科・理科に関しては、曲田⁶⁾による研究において戦後教育改革期に生活改善や住宅復興を主題とした単元が設けられていたこと、そしてそれらが1955年以降、次第に系統主義への転換に伴って消滅したことを明らかにされている。社会科教科書『村や町の発達とわたしたちの生活 4』においては系統的な都市計画の学習が試みられており、また理科についても「戦災による住宅被害、それを克服するための方策と都市復興」が扱われていたが、徐々に生活改善・都市計画の色彩は薄れ、1955年前後には系統的な学習へと移行したことが示されている。

家庭科は、数学科・社会科・理科とは異なり、戦後一貫して住生活教育がおこなわれている点に特色があるといえるが、戦後教育改革期の教科書は取り立てて注目されておらず、そのうえ否定的評価が支配的である⁷⁾。

本研究では、上述のように各教科別に分散して扱われている戦後教育改革期の住生活教育史の記述を参照しつつ、それらを有機的に結びつけ、教科間の連絡がどのように図られていたのか、あるいは図られていなかったのか、同時代の住生活関連言説を踏まえて描き直すことを試みる研究視座に立つ。本稿はその前提作業として、検定教科書にみられる「住宅」単元の掲載状況について明らかにするものである。

3. 対象と方法

本稿では、教科書の目次の総覧と「住宅」単元の抽出を経て、収集した単元の分類を行い、各教科の独自性、教科間の連携の検討を行うための前提作業として、戦後教育改革期に出版された小中学校検定教科書の悉皆調査を行い、「住宅」単元の掲載状況の把握を試みた。

対象とする教科書の発行時期は、生活経験主義の学習指導要領といわれる1950年改訂の学習指導要領に基づく教科書が主に使用された1951~1956年を対象期間とし、特に「住宅」単元における学習内容が教科書から詳細に把握できる算数・数学科、理科、社会科に着目した。

対象教科書の目次を総覧し、「住宅」に関する内容が含まれる単元(あるいは単元に準ずる内容のまとまり)を抽出・リスト化を行い、その掲載状況を明らかにした。

4. 文部省著作教科書にみられる「住宅」単元

戦後教育改革において、教科書は旧来の国定精度から検定制度へと転換した。民間教科書会社の編集・作成した教科書について、文部省が一定の検定基準に照らして審査し、可否を決定した。しかしながら、検定制度への移行期間においては、暫定的に文部省が作成した著作教科書が1947年から1952年ごろまで使用されることになった⁸⁾。民間教科書会社が検定教科書を作成するにあたって、文部省著作教科書がモデルとしての役割を担ったことから、当該教科書についても「住宅」単元の掲載状況をみておく。

小学校の算数教科書では、尺貫法について言及する際に、坪数・畳数が登場する程度で、まとまった単元はみられない。それに対し理科教科書は、特に第5学年を対象とした『小学生の科学10』において衣領域とあわせて住領域が扱われた^{注1)}。社会科では第5学年から第6学年を対象とした『私たちの生活』(全4巻)において、それぞれ「住宅」を題材とした単元が登場している^{注2)}。

一方で中学校では、数学科教科書の第1学年対象『中学生の数学 一(1)』の「第I単元」において住宅が取り上げられている。また、理科教科書でも第2学年対象『私たちの科学12』が「家はどのようにしてできるか」として分冊化されている。社会科では住宅への言及は散見されるものの、まとまった記述としては第1学年用『社会科5日本の都市』が挙げられる^{注3)}。

以上のように、文部省著作教科書では、小学校算数科では目立った言及がみられないものの、中学校数学科や小・中学校理科においては特に「住宅」についての単元が設けられている。対して小・中学校社会科では、さまざまな単元において住宅への言及が分散してみられる点に特徴がある。こうした文部省著作教科書を参照しつつ、民間教科書会社は、それぞれに検定教科書を作成し、「住宅」単元を作成していったものと考えられる。

5. 「住宅」単元の掲載状況

5.1 小学校検定教科書

「住宅」単元の掲載がみられる小学校検定教科書をまとめたものが表1である。該当する教科書は、算数科32冊、理科38冊、社会科62冊であった。

算数科では第6学年において「私の家」「私たちのすまい」「家の間取り」といった単元のほか、「間・尺・寸・坪」といった単位換算にかかわる単元も設けられている。理科では文部省著作教科書と同様に、第5学年において「すまいときものは健康にどんな関係があるか」「健康に良いすまいと着物」といった衣と住をあわせた掲載がみられるほか、「家」「すまいとけんこう」といった住宅単体での単元化もなされている。社会科では第3学年から第6学年までの複数学年において扱われている。しかし、算数科や理科とは異なり単元として立項されておらず、「すみよい住居」「家のかたち」「すまいの材料」など、それぞれの単元のなかで「住宅」にかかわる内容が適宜掲載されている。なお、3教科ともに対象期間を通して毎年、複数の教科書での掲載を確認できる。

5.2 中学校検定教科書

「住宅」単元の掲載がみられる中学校検定教科書をまとめたものが表2である。該当する教科書は、数学科19冊、理科30冊、社会科26冊であった。

数学科は文部省著作教科書と同様、第1学年において「われらのすまい」「私たちの住居」「すみよい家」といった単元が設けられている。形態に着目した「住まいと形」や、「食物と住居」もみられる。理科においても文部省著作教科書と同じく第2学年を対象とし「家と私たち」「すまいと生活」「健康な生活」などの単元が設けられ、単元ごとに分冊化されているものもみられる。社会科は第1学年から第3学年まで扱われている。「社会生活」「学校と家庭」「都市と村」といった単元のなかで「住宅」に関連した内容が取り上げられ、単元として立項されないのは小学校と同様である。また、3教科ともに対象期間を通して毎年、複数の教科書での掲載を確認できる。

6. 結論

本稿では戦後教育改革期における小中学校検定教科書を対象として、「住宅」単元の掲載状況を明らかにした。民間教科書会社は文部省著作教科書を参照しつつ、それぞれに検定教科書の作成にあたって「住宅」単元を掲載してきた状況を整理・把握できた。

検定教科書では、特に中学校数学科では第1学年に、小学校理科は第5学年、中学校理科では第2学年において、「住宅」を主対象として教材化した単元を確認できた。一方で小中学校社会科では、住宅についての言及は数多くみられるものの、特定の学年や単元に限定されずに扱われている。

なお、同一の教科書会社であっても、教科書の改訂に際して「住宅」単元の扱いが変化していることもうかがわれるとともに、同じ使用年度であっても「住宅」単元の掲載状況は教科書会社により異なっている。「住宅」単元の多様な相貌をより明らかにするためにも、教科書の具体的な記載内容、戦後教育改革期を通して見た変遷についてみていく必要があり、稿を改めて論ずる。

謝辞

本研究は一般財団法人住総研の研究助成（助成番号2310「戦後教育改革期の教科書における住生活教育：教科横断型「住宅」単元の構想へ向けて」）による研究成果の一部である。

注

- 注1) 『小学生の科学10』では、衣食住を扱った「よいたべ物をとるにはどんな工夫をしたらよいか すまいやきものは健康とどんな関係があるか」として分冊化され、単元「17. すまいやきものは健康とどんな関係があるか」として掲載されている。
- 注2) 『私たちの生活(一) 村の子ども』では、住宅改善について言及があるほか、『私たちの生活(二) 都会の人たち』では、「1. 私の家」において雑居家族の事例が、「9. 街頭録音」では様々な住宅事例が、そして「14. これからの都市」では不燃集合住宅が取り上げられている。『私たちの生活(三) 土地と人間』でも、いろいろな土地でくらす人々の家が紹介され、『私たちの生活(四) 気候と生活』でも、「気温と家」、「さばくの家」、「雪とたたかう人たち」といった記述がみられる。
- 注3) 『社会科5 日本の都市』は、「現代の都市」、「都市の発達」、「これからの都市」の3章で構成されており、そのなかで過去や現在の家屋などへの言及が散見される。

参考文献

- 1) 蒔苗直道. (2001). 「総合的な学習の時間」に対する終戦直後の数学教育史からの示唆：文部省著作教科書『中学生の数学』にみる数学と生活の関連に焦点をあてて. 日本数学教育学会誌, 83(11), 13-20.
- 2) 蒔苗直道. (2011). 戦後教育改革期の数学教育における単元学習の展開：GHQ/SCAP文書による時代考証. 戦後教育史研究, (25), 21-32.
- 3) 蒔苗直道. (2012). 昭和24年の文部省著作教科書『中学生の数学』における「住宅」の単元の再評価：『Everyday Junior Mathematics』との比較を視点に. 日本数学教育学会誌, 臨時増刊・数学教育学論究, 96, 19-36.
- 4) 竹内孝治, 瀬川朗. (2021a). 中学校数学科検定教科書『日常の数学』（1950年）における単元「私たちの住居」の成立とその背景. 愛知産業大学造形学研究所報, (17), 11-20.
- 5) 竹内孝治, 瀬川朗. (2021b). 戦後教育改革期の数学科教科書における「住居」についての単元の変遷：大日本図書『日常の数学』『中学の数学』および『中学新数学』を資料として. 愛知産業大学造形学研究所報, (17), 21-30.
- 6) 曲田清維. (1994). 住環境教育に関する研究：学校教育を中心として. 大阪市立大学博士論文, 乙第1683号.
- 7) 新福祐子. (1977). 家庭科教育における指導内容の歴史的考察-3-戦後における中学校教育の中での住居指導. 大阪教育大学紀要, 第5部門, 教科教育, 26(2), 117-142.
- 8) 仲新. (1969). 日本現代教育史, 東京：第一法規

表1 「住宅」単元の掲載がみられる小学校検定教科書(1951-1956年)

算数科

No.	教科書名	使用開始年	学年	発行者	教科書記号番号	該当頁	備考
1	六年生の算数 上	1951	6	11 学図	小算 612	52-89	3 家の広さと間取り図 他
2	小学算数 六年上	1951	6	12 二葉	小算 616	105-128	IV 私たちの家 他
3	算数 第6学年用1	1951	6	4 大日本	小算 606	35-62	二 住みよい家
4	小学新算数 6-上	1952	6	1 日書	小算 624	27-35	二 私の家
5	六年生の算数 上	1952	6	11 学図	小算 626	83-98	5 家の広さ
6	算数の学習 六年生下	1952	6	11 学図	小算 631	32-56	2 家の間取り(尺・間・坪)
7	小学算数 六年上	1952	6	12 二葉	小算 620	105-128	IV 私たちの家 他
8	改訂 新しい算数 六年下	1952	6	2 東書	小算 629	72-75	わたくしたちの家
9	六年生の算数 下	1952	6	3 大書	小算 637	146-165	11 私たちのすまい
10	良い子の算数 6年上	1952	6	55 広図	小算 634	84-115	4 家の建てまし(尺・間・坪・角)
11	小学生の算数 六年上	1952	6	61 啓林館	小算 622	112-131	4 わたくしたちの健康 (3) 家の間取り
12	小学新算数 6-上	1953	6	1 日書	小算 646	27-58	二 私の家(長さの単位・家計簿・角度)
13	小学算数 六年上	1953	6	12 二葉	小算 650	94-119	IV 私たちの家(間・尺・寸・坪)
14	改訂 新しい算数 六年下	1953	6	2 東書	小算 649	4-23	私たちの家
15	六年生の算数 下	1953	6	3 大書	小算 655	146-164	11 私たちのすまい
16	算数の本 第六学年用(1)	1953	6	5 中教	小算 642	53-70	3 私たちの家
17	新修 よいこの算数 6年上	1953	6	55 広図	小算 652	84-115	4 家の建てまし(尺・間・坪・角)
18	小学生の算数 新版 六年上	1953	6	61 啓林館	小算 644	112-131	4 わたくしたちの健康 (3) 家の間取り
19	小学算数 6上-新しい教育計画による一	1954	6	1 日書	小算 656	74-85	8 間・尺・寸・坪
20	よいこの算数 6年上	1954	6	3 大書	小算 652	84-115	4 家の建てまし(尺・間・坪・角)
21	小学算数 6年下	1954	6	3 大書	小算 659	20-34	日本の家
22	算数の本 第六学年用 改訂版(1)	1954	6	5 中教	小算 662	94-123	4 私たちの家
23	算数 六年生上	1954	6	64 績文堂	小算 660	117-130	IV 測定 8 家の間取り
24	小学校算数 6年下	1955	6	11 学図	小算 663	4-20	1 家の間取り(尺貫法の長さ)
25	標準算数 6上	1955	6	17 教出	小算 666	63-72	6 尺・間・坪
26	小学算数の本 6年(1)	1955	6	5 中教	小算 668	94-123	4 私たちの家
27	小学生算数 6年下	1955	6	61 啓林館	小算 671	49-66	13 形と面積
28	小学校算数 6年下	1956	6	11 学図	小算 675	4-20	1 家の間取り(尺貫法の長さ)
29	新版 小学算数 6年上	1956	6	12 二葉	小算 680	80-90	7 家の広さやしき地の広さ(尺・貫・法)
30	改訂 新しい算数 六年下	1956	6	2 東書	小算 685	28-50	長さと面積
31	小学算数 6年下	1956	6	3 大書	小算 677	20-37	日本の家
32	算数の本 再訂版 6年(1)	1956	6	5 中教	小算 678	94-123	4 私たちの家

理科

No.	教科書名	使用開始	学年	発行者	教科書記号番号	該当頁	備考
1	五年生の理科 下	1951	5	11 学図	小理 520	101-122	6 すまいときもの
2	たのしい科学 B 物の使い方と作り方 (2)	1951	5	1 日書	小理 517	29-46	私たちの家
3	たのしい理科 第5学年用E 16. よい食物をとるにはどうすればよいか 17. すまいときものは健康とどんな関係があるか	1951	5	4 大日本	小理 510	35-64	17 すまいときものは健康とどんな関係があるか
4	新しい理科 第五学年用5 よい食べ物をとるにはどことなくふうをすればよいか すまいときものは健康とどんな関係があるか	1951	5	2 東書	小理 515	43-72	10 すまいときものは健康とどんな関係があるか
5	たべものをとるにはどんな工夫があるか どんなきものやすまいがよいか (5)	1951	5	30 北教	小理 525	42-61	どんなすまいときものがよいか
6	五年生の理科 下	1952	5	3 大書	小理 543	5-28	7 どんなきものやすみかが健康によいでしょう
7	新たなのしい科学 5B	1952	5	1 日書	小理 538	91-104	6 どんなすまいときものが健康によいでしょう 2 すまいと健康
8	よいこのかがく 五年の上	1952	5	55 広図	小理 540	82-96	どんなすまいときものが健康によいでしょう
9	小学生の理科 5年中	1952	5	12 二葉	小理 545	62-71	よいすまい
10	新しい理科 小学五年下	1952	5	61 啓林館	小理 527	57-78	7 家
11	五年生の理科 下	1952	5	11 学図	小理 529	99-127	10 すまいときもの
12	新しい理科 第5学年用3 天気はどんな変わり方をするか よい食物をとるにはどことなくふうをすればよいか すまいときものは健康とどんな関係があるか	1952	5	2 東書	小理 532	81-112	10 すまいときものは健康とどんな関係があるか
13	小学生の理科 5年中	1952	5	59 日教図	小理 548	52-61	16 健康とすまい
14	たのしい理科 (新版) 5年2	1952	5	4 大日本	小理 536	3-22	6 どんなすまいときものが、からだによいでしょう
15	理科の学習 五年生下	1952	5	11 学図	小理 534	100-125	5 健康によいすまいと着物
16	新たなのしい科学 5下	1953	5	1 日書	小理 551	4-19	7 健康によいすまい
17	新しい理科 新版 小学五年下	1953	5	61 啓林館	小理 555	57-78	7 家
18	五年生の理科 下	1953	5	11 学図	小理 557	99-127	10 すまいときもの
19	改訂 新しい理科 五年下	1953	5	2 東書	小理 561	25-40	II 住まいと着物
20	私たちの理科 5年下	1953	5	4 大日本	小理 553	4-21	8 どんなすまいときものがからだによいか
21	小学生の科学 5年~1	1953	5	30 中央	小理 558	171-191	どんなすまいときものがよいか
22	改訂版 よいこのかがく 五年上	1953	5	55 広図	小理 562	82-96	どんなすまいと着物が健康によいでしょう
23	五年生の理科 下	1953	5	3 大書	小理 565	16-28	7 どんなきものやすみかが健康によいでしょう

24	みんなの理科 5年下	1954	5	5 中教	小理 571	109-120	21 すまいとけんこう
25	理科の世界 5年下	1954	5	4 大日本	小理 573	72-83	12 どんなすまいがけんこうによいでしょう
26	小学理科 5年下	1954	5	61 啓林館	小理 567	53-61	9 きものと家
27	よいこのかがく 五年上	1954	5	3 大書	小理 562	82-96	どんなすまいや着物が健康によいでしょう
28	みんなの理科 改訂版 5年下	1955	5	5 中教	小理 577	109-120	21 すまいとけんこう
29	小学生の理科 5年下	1955	5	59 日教図	小理 579	32-41	16 健康とすまい
30	新訂 小学生の理科 5年下	1955	5	12 二葉	小理 575	22-31	よいすまい
31	よいこのかがく 五年上	1955	5	3 大書	小理 584	82-96	4 どんなすまいや着物が健康によいでしょうか
32	理科 5年下	1955	5	26 信教	小理 587	41-48	8 どのような着物やすまいがけんこうによいでしょうか
33	小学校理科 5年下	1955	5	11 学図	小理 583	64-74	12 すまいと着物
34	小学生の理科 5一下	1955	5	1 日書	小理 581	4-19	7 健康によいすまい
35	新編 新しい理科 5年下	1956	5	2 東書	小理 595	46-55	14 すまい
36	小学理科 5年下	1956	5	61 啓林館	小理 589	53-61	9 きものと家
37	理科 5年下	1956	5	12 二葉	小理 593	57-68	10 家
38	新小学生の理科 5年下	1956	5	12 二葉	小理 591	31-48	9 よいすまい

社会科

No.	教科書名	使用開始	学年	発行者	教科書記号番号	該当頁	備考
1	小学生の社会 3年用下 たから村の子どもたち	1951	3	1 日書	小社 304	96-103他	むかしのはなし
2	小学生の社会 私たちの生活は進む 上	1951	5	1 日書	小社 506	4-31	1 住居のさまざま/2 これからの住居
3	世の中はすすんでいる	1951	4	12 二葉	小社 403	63-77, 175-183	いろいろな家/べんりな台所
4	小学生の社会 新しい道古い道	1951	4	1 日書	小社 402	70-73	たべものとすまい
5	明かるい生活 上巻	1951	5	39 緑風	小社 508	121-141	住い/家のうづりかわり
6	生活の進歩	1951	5	12 二葉	小社 510	14-37	すみよい住居
7	新しい社会科 五年上	1951	5	2 東書	小社 504	48-62, 83-86, 120-128	都会のくらし/漁村のくらし/農村のくらし
8	小学生の社会 町と村 3下	1955	3	1 日書	小社 362	4-15	1 私たちのくらし
9	小学生の社会 産業と生活 5上	1955	5	1 日書	小社 566	112-117	6 わたしたちのすまい
10	新しい社会科 六年下	1951	6	2 東書	小社 605	78-87	2 生活の改善
11	わたくしの社会科 4年下	1952	4	39 富士	小社 419	17-19	家のかたち
12	あの国この国	1951	6	11 学図	小社 602	70-74	めずらしい熱帯の家
13	五年生の社会科 進み行く生活 上	1952	5	3 大書	小社 521	26-33, 66-77, 111-124	1 農業と生活/2 漁業と生活/3 石炭をほる
14	(私たちの社会科 六年) 世界のくらしと日本の政治	1952	6	11 学図	小社 624	62-66	めずらしい熱帯の家
15	六年生の社会 下	1952	6	11 学図	小社 612	61-77	寒い国/暑い国
16	小学生の社会 四上 土地をひらく	1952	4	1 日書	小社 405	66-70	かや屋根のふきかえ
17	三年生の社会科 いろいろなくらし 下	1952	3	3 大書	小社 328	83-88	3 大むかしのくらし
18	小学生の社会 3下 たから村の子どもたち	1952	3	1 日書	小社 320	101-114	14 むかしのはなし
19	小学生の社会 五上 自然を生かして	1952	5	1 日書	小社 512	13-27	3 住居のはじめ/4家をつくるもの
20	改訂 新しい社会科 六年上	1952	6	2 東書	小社 613	76-93	3 私たちの生活の改善
21	わたくしの社会科 5年上	1952	5	39 富士	小社 525	70-106	すまいの材料はどのようにして作られてきたのでしょうか
22	村や町の発達 社会科 四年中	1953	4	12 二葉	小社 421	34-44他	2 いろいろな土地の生活
23	三年生の社会科 いろいろなくらし 下	1953	3	3 大書	小社 344	64-69	4 大むかしのくらし
24	物資の生産と私たちの生活 社会科 五年上	1953	5	12 二葉	小社 529	52-54	3 産業のすがた
25	わたくしの社会科 四年下	1953	4	39 富士	小社 428	17-19	町の発達
26	改訂 新しい社会科 六年上	1953	6	2 東書	小社 632	76-93	3 私たちの生活の改善
27	五年生の社会科 進み行く生活 上	1953	5	3 大書	小社 542	26-33, 66-77, 111-124	1 農業と生活/2 漁業と生活/3 石炭をほる
28	わたくしの社会科 五年上	1953	5	39 富士	小社 538	68-104	2 すまいの材料
29	改訂 新しい社会科 五年下	1953	5	2 東書	小社 537	4-9, 62-65他	1 都会のくらし/2 漁村のくらし他
30	改訂版 五年生の社会科 進み行く生活 上	1954	5	3 大書	小社 552	26-33, 66-79, 111-124	1 農業と生活/2 漁業と生活/3 石炭をほる
31	改訂版 三年生の社会科 いろいろなくらし 下	1954	3	3 大書	小社 354	64-69	4 大むかしのくらし
32	改訂 新しい社会科 五年下	1952	5	2 東書	小社 518	4-9, 63-66他	1 都会のくらし/2 漁村のくらし/3 山村のくらし/4 農村のくらし
33	改訂 新しい社会科 五年上	1952	5	2 東書	小社 517	42-45, 58-59他	1 日本の産業はどのように発達してきたか
34	小学生のしゃかい あかるいくらし 3上	1954	3	1 日書	小社 347	19-21, 118-122	1 三年生になって/6 あかるい世の中
35	三年生の社会科 いろいろなくらし 下	1951	3	3 大書	小社 308	80-85	3 大むかしのくらし
36	たのしい社会科 6年上	1955	6	4 大日本	小社 653	95-105	3 国民生活を高めるために
37	たのしい社会科 6年上	1956	6	4 大日本	小社 682	117-134	3 国民生活を高めるために
38	小学社会 日本の生産と生活 5上	1955	5	46 帝国	小社 560	16-17	私たちの国土
39	小学社会 3ねん下	1955	3	3 大書	小社 370	40-73	2 すまい
40	小学社会 5年上	1955	5	3 大書	小社 571	4-9他	1 農家の生活他

41	新しい社会 四年下	1955	4	2 東書	小社 477	22-27	1 大むかしからの生活
42	新訂 わたしたちのくらしと村や町のしごと 社会科 三年上	1955	3	12 二葉	小社 373	44-50, 88-89	3 かわって来た村や町のように、5 みんなでよくする村や町
43	新訂 世界につながる私たちの生活 社会科 六年下	1955	6	12 二葉	小社 667	18-21	1 わが国と世界との結びつきの歴史
44	日本の社会 四年下	1954	4	8 実日	小社 436	4-44	すまい、あかり、ねんりょう
45	ひょうじゅん小学社会 3年上	1955	3	17 教出	小社 367	124-128	3 いろいろな村や町
46	日本の社会 六年上	1954	6	8 実日	小社 640	78-87	世界の人々
47	小学社会 村や町のはったつ 4下	1955	4	46 帝国	小社 467	72-75, 84-85, 92-107	山村・農村・漁村 / かわった土地のくらし
48	日本の社会 四年下	1955	4	8 実日	小社 464	4-44	すまい、あかり、ねんりょう
49	新訂 村や町の発達とわたしたちの生活 社会科 四年中	1955	4	12 二葉	小社 481	34-41	2 いろいろな土地の生活
50	あたらしいしゃかい 三年下	1955	3	2 東書	小社 372	84-88	4 大むかしの人と今の人
51	小学社会 村や町のはったつ 4下 改訂版	1956	4	46 帝国	小社 488	72-75, 84-85, 98-99 他	山村・農村・漁村 / かわった土地のくらし
52	ひょうじゅん小学社会 3年上	1956	3	17 教出	小社 385	128-132	3 いろいろな村や町
53	改訂 新しい社会 四年下	1956	4	2 東書	小社 492	22-27	1 大むかしからの生活
54	改訂 あたらしいしゃかい 三年下	1956	3	2 東書	小社 380	84-88	4 大むかしの人と今の人
55	協力する社会 四年上	1956	4	12 二葉	小社 4-408	44-47	1 わたしたちの郷土の生活
56	新訂 小学社会 5年上	1956	5	3 大書	小社 585	17-23他	2 農家の生活他
57	新訂 小学社会 3年下	1956	3	3 大書	小社 384	40-70	2 すまい
58	新訂 小学社会 3年上	1956	3	3 大書	小社 383	26-28, 57-62	1 村のくらし / 3 町のくらし
59	小学社会 日本の生産と生活 5上 改訂版	1956	5	46 帝国	小社 579	16-17	私たちの国土
60	小学生の社会 改訂版 産業と生活 上小学校5年用	1956	5	1 日書	小社 577	112-134	衣食住の資源と生活
61	小学生の社会 改訂版 きょうどのくらし 下小学校4年用	1956	4	1 日書	小社 498	54	土地とくらし
62	日本の社会 六年上	1955	6	8 実日	小社 657	78-83	世界の人々

表2 「住宅」単元の掲載がみられる中学校検定教科書(1951-1956年)

数学科

No.	教科書名	使用開始年	学年	発行者	教科書記号番号	該当頁	備考
1	中学新数学 下	1951	1	1 日書	中数 718	267-310	単元VII われらのすまい
2	新しい数学 中学一年上	1951	1	2 東書	中数 711	131-168	単元IV わたくしたちのすまい
3	日常の数学 二冊制 第1学年用2	1951	1	4 大日本	中数 722	259-300	単元7 私たちの住居
4	私たちの数学 第一学年用(1)	1951	1	5 中教	中数 713	141-166	第三単元 私たちの健康(第6章 すまいときもの)
5	中学生の数学(下)	1951	1	6 教図	中数 716	185-233	第9単元 私たちのすまい
6	中学新数学 一下 改訂版	1952	1	1 日書	中数 732	267-310	単元VII われらのすまい
7	生きた数学 1下	1952	1	17 教出	中数 728	277-311	単元6 これからの住まい
8	一年生の数学 下	1952	1	3 大書	中数 730	119-154	VIII すみよい家
9	日常の数学(新版) 1年下	1952	1	4 大日本	中数 722	259-300	単元7 私たちの住居
10	私たちの数学の本 第一学年用(2)	1952	1	5 中教	中数 734	173-202	第四単元 私たちの健康
11	中学生の数学 1下 改訂版	1952	1	6 教図	中数 738	147-195	第8単元 私たちのすまい
12	中等数学 1-1	1952	1	64 續文堂	中数 741	163-183	第四単元 食物と住居(2 住居)
13	改訂 新しい数学 中学一年上	1953	1	2 東書	中数 751	115-140	第四単元 すまいと形
14	私たちの数学 中学校第一学年(1)	1953	1	20 富山房	中数 754	7-52	第一単元 私たちのすまい
15	一年生の数学 下	1953	1	3 大書	中数 759	119-154	VIII すみよい家
16	中学の数学 1年下	1953	1	4 大日本	中数 748	113-120	研究IV すまいの改善
17	改訂 新しい数学 中学一年上	1955	1	2 東書	中数 771	115-140	第四単元 すまいと形
18	新版 中等数学 第一学年用1-1	1955	1	64 續文堂	中数 777	140-158	第四単元 食物と住居(2 住居)
19	改訂 新しい数学 中学一年上	1956	1	2 東書	中数 789	115-140	第四単元 すまいと形

理科

No.	教科書名	使用開始年	学年	発行者	教科書記号番号	該当頁	備考
1	生活と科学 5 衣食住の生活(二年B)	1951	2	1 日書	中理 830	127-175	III 住みよい家
2	自然のなぞ 4 すまい	1951	2	5 中教	中理 826	全体	
3	新制理科 第12単元 家と私たち	1951	2	11 学図	中理 825	全体	
4	科学の世界 日常の科学 上	1952	2	4 大日本	中理 849	107-158	3 健康を保ち進めるにはどんな家に住んだらよいか
5	中学生の理科 日常の科学 上(中学校第二学年用)	1952	2	15 三省堂	中理 867	119-176	単元3 われわれの健康を保ち進めるためには、どのような家にすみ、またどのような考え方もとづいて家庭生活や社会生活を営んだらよいか
6	中学理科 第2学年上巻	1952	2	51 講談社	中理 859	105-159	単元3 健康な生活をするにはどのような家がよいか
7	私たちの科学研究(新版) 日常の科学 上	1952	2	4 大日本	中理 847	117-174	3 健康を増進するにはどんな家に住んだらよいか

8	中学理科 二年 日常の科学 1	1952	2	11 学図	中理 843	113-168	単元3生活にはどのような家が良いか
9	生活と科学 2A 衣食住の生活	1952	2	1 日書	中理 851	101-149	III 住みよい家
10	自然のなぞ 二学年 生活をいろいろ科学 上	1952	2	5 中教	中理 857	149-214	単元6 どんな家が良いだろうか / 単元7 家の材料には何がよいか
11	新版 私たちの理科 9 すまいと生活	1952	2	22 愛育社	中理 863	全体	
12	改訂 新しい科学 中学二年上「食物とからだ」「着物」「家」	1953	2	2 東書	中理 875	103-152	単元3 家やすまいは、保健上どのようなものがよいか
13	中学理科 2上	1953	2	51 講談社	中理 869	101-155	単元3 健康な生活するにはどのような家が良いか
14	中学生の科学 日常の科学 1 2年用	1953	2	30 中央	中理 873	133-175	単元3 健康な家
15	改訂 私たちの理科 二年上	1953	2	22 愛育社	中理 877	95-162	3 すまいと生活
16	自然 2下	1954	2	38 光村	中理 882	216-238	X 衣食住(3家)
17	中学生の理科 二年	1954	2	12 二葉	中理 879	109-158	単元3 どんな衣服と住居が健康で便利か
18	新版 中学生の科学 2・B	1954	2	66 学芸	中理 890	101-143	VII 健康な生活するには家はどのように建てればよいか
19	理科 中学校2年全	1954	2	56 青雲	中理 880	145-190	単元4 私たちの生活にはどのような家が良い
20	中学理科 2年	1955	2	3 大書	中理 8-805	117-142	第4単元 じょうぶな建物
21	中学新理科 2上	1955	2	4 大日本	中理 896	121-142	3 健康な生活(3住居)
22	中学生の理科 三訂版 日常の科学 第二学年用下	1955	2	15 三省堂	中理 8-804	86-125	単元6 家
23	新編 新しい科学 二年上	1955	2	2 東書	中理 8-800	93-150	単元3 衣服と住居: ような衣服や家が健康によくて便利か
24	自然のなぞ 二年 改訂版	1955	2	5 中教	中理 893	127-180	単元10 家
25	中学理科教科書 2年	1955	2	43 牧	中理 8-802	113-168	3 健康的なきものとするまい
26	中学理科 第二学年全	1955	2	61 啓林館	中理 898	155-176	III 食物・衣服・住居(6 住宅はどのようにして建てるか / 7 はどのような構造になっているか)
27	中学理科 2年	1956	2	3 大書	中理 8-806	111-136	第4単元 じょうぶな建物
28	中学理科教科書 2年	1956	2	43 牧	中理 8-807	113-168	3 健康的なきものとするまい
29	改訂 中学理科 2上	1956	2	51 講談社	中理 8-808	101-156	単元3 健康な生活するにはどのような家が良いか
30	改訂 中学生の理科 2年	1956	2	12 二葉	中理 8-810	113-162	単元3 衣服と住居(III 住居の役わり)

社会科

No.	教科書名	使用開始年	学年	発行者	教科書記号番号	該当頁	備考
1	中学社会 1 我が国 家庭生活 学校生活	1951	1	11 学図	中社 712	79-134	家庭生活
2	日本の自然と私たちの生活 社会科 1年用	1951	1	5 中教	中社 716	49-66, 70-77	日本の都会とその生活
3	中学社会 5 文化遺産 芸術と社会生活 宗教と社会生活 共同生活	1951	3	11 学図	中社 908	27-30	III 生活文化(3住生活)
4	中学社会 2 いなかの生活 都市の生活 余暇の利用	1951	1	11 学図	中社 713	15-19, 130-150	いなかの生活 / 都市の生活
5	中学社会 私たちの生活圏 一年1	1952	1	11 学図	中社 726	12-59	第1部 家庭の生活と学校の生活
6	中学生の社会科 第一学年 日本の生活世界の生活下	1952	1	5 中教	中社 744	11-14	世界の国々
7	新制社会 中学一年上 学校と家庭・わが国土	1952	1	53 日地	中社 745	30-35, 56-67	学校と家庭
8	われわれの生活圏	1952	1	62 自由	中社 749	51-54	学校と家庭
9	中学生の社会科 第一学年 日本の生活世界の生活上	1952	1	5 中教	中社 743	100-118	学校と家庭
10	中学生の社会 1の1 1. 学校と家庭	1952	1	1 日書	中社 731	87-103	第12章 家族の関係と責任 / 第13章 家庭生活の改善
11	新制社会 中学二年上 都市といなか・近代工業の発達	1952	2	53 日地	中社 825	15-21, 53-60	都会といなか
12	新制社会 中学二年上 都市といなか・近代工業の発達	1953	2	53 日地	中社 840	15-21, 53-60	都会といなか
13	新制社会 中学一年上 学校と家庭・わが国土	1953	1	53 日地	中社 755	30-35, 56-67	学校と家庭
14	中学社会科 2年用上 われわれの社会生活	1953	2	62 自由	中社 853	64-79	第一単元「都市と村」
15	中学社会科 3年用下 われわれの社会生活	1953	3	62 自由	中社 932	93-104	第四単元「文化遺産」
16	中学社会科 1年用上 われわれの社会生活	1953	1	62 自由	中社 768	57-67	第一単元「学校と家庭」
17	人間と環境 資源	1954	2	6 教図	中社 858	52-68	単元III 都市と農村との問題
18	中学生の社会科 第一学年 日本の生活・世界の生活 改訂版 下	1954	1	5 中教	中社 786	17-19	世界の国々
19	模範中学社会 第二学年用上	1954	2	7 実教	中社 863	75-90	村と都市
20	中等社会科 1 私たちの生活環境	1954	1	15 三省堂	中社 792	59-65	1 私たちの学校や家庭
21	模範中学社会 第一学年用上	1954	1	7 実教	中社 795	56-60	中学生
22	改訂 中学社会 私たちの生活圏 1年1	1954	1	11 学図	中社 771	11-58	第1部 家庭の生活と学校の生活
23	中学生の社会科 第一学年 日本の生活・世界の生活 改訂版 上	1954	1	5 中教	中社 785	86-101	学校と家庭
24	人間と環境 日本	1954	1	6 教図	中社 789	57-73, 194-196	単元I 学校・家庭 / 単元III 日本社会のあゆみ
25	新中等社会科 1 日本	1955	1	15 三省堂	中社 7-784	45-52	1 私たちの学校や家庭
26	日本の課題 (3) 近代工業と都市(総合)	1955	2	6 教図	中社 871	155-156	単元V 近代社会と都市

工業デザイナー・秋岡芳夫のものづくり思想にみられる住まい観

View of Housing in Manufacturing Philosophy by Yoshio Akioka, an Industrial Designer

竹内 孝治*, 森本 達也**
Kohji TAKEUCHI, Tatsuya MORIMOTO

Keywords : *Critique of Industrialization, Standardization, Housing Industry, Life Experience, Sense of Life, Wood working*

工業化批判, 画一化, 住宅産業, 生活体験, 生活感覚, 木工

1. はじめに

戦後日本を代表する工業デザイナー・秋岡芳夫(1920-1997)は、「KAK デザイングループ」や「グループモノ・モノ」等の活動を通して積極的なデザイン・プロジェクトを展開してきたのみならず、童画家、木工家、プロデューサー、道具の収集家など多彩な顔を持ったことでも知られる。また、秋岡は多数の著作を残したことで知られる。その内容も多岐にわたり、デザインに関するエッセイのほか、木工・大工技術や道具に関するもの、食器や等の生活用具に関するもの、さらには竹とんぼを主題としたものにまで及んでいる。

ところで、上述したように多面的かつ精力的な活動を残した秋岡であるが、その業績や近代日本のデザイン史における意義に関する既往研究は、河内¹⁾によるモノグラフのほか、新莊²⁾によるグループモノ・モノ研究、回顧展に併せて刊行された図録³⁾がある程度で十分とは言いがたいのが現状である。また、生活道具から木工や大工道具に至るテーマを何度となく論じている彼の姿勢に一貫する「消費の時代」への批判的視点は、1970年代後半から80年代にかけて展開されたがゆえに、文明開化から高度成長期へと至る日本の近代化を乗り越えようとするがあまりの偏向があることは予想されるにせよ、今こそ改めて見直されるべき内容とも見なせる。

そこで本研究は、秋岡芳夫が残した数多くの著作に着目し、木工や生活道具への温かな眼差しの先にある豊かな生活世界としての「住まい」がいかに語られているかを読解することを通して、彼のものづくり思想において「住まい」がしめた位置づけの解明を企図する。

2. 研究の方法

2-1. 研究対象

秋岡芳夫の住まい観を明らかにするため、数多く残された著作群を通覧し、主として住まいを主題とする内容を含む著作を選定し、そこに見られる言及箇所を、住まい関連言説として分析を進めた。併せて、著書には収録されていない「悪魔の住居学」(月刊ダイヤモンド・ボックス、創刊号、1980.4 所収)についても適宜参照した。

2-2. 研究方法

本稿では、まず、既往研究を整理するとともに、秋岡の著書・論考の収集・整理を通して、秋岡のものづくり観を把握した。あわせて、住まい関連言説の収集・分析を行うことで、秋岡のものづくり思想にみられる住まい観を明らかにした。

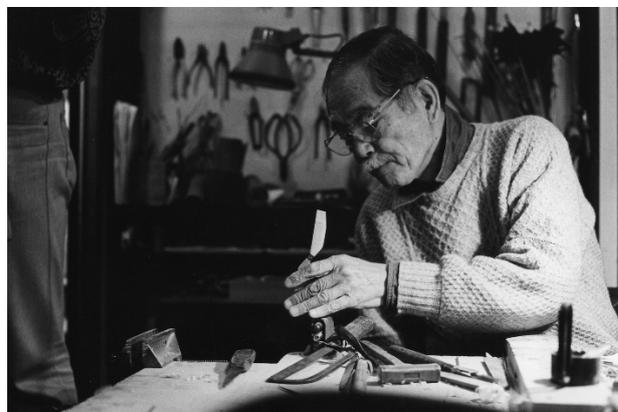


図1 秋岡芳夫 (1920-1997)

*愛知産業大学造形学部建築学科 准教授・修士(建築学) Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Architecture and design, Aichi Sangyo Univ., M. Arch.

**愛知産業大学造形学部建築学科 講師・修士(芸術) Assist. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Architecture and design, Aichi Sangyo Univ., M. Art

3. 秋岡芳夫の経歴と建築・デザイン活動

秋岡芳夫のものづくり思想にみられる住まい観を明らかにすることに先立ち、まず、彼の経歴ならびに建築・デザイン活動を概観すべく表1にまとめた⁴⁾。

1920年、熊本県に生まれた秋岡は1941年に東京高等工芸学校木材工芸科を卒業後、東京都建築局学校営繕課に技手として就職するも、太平洋戦争下に兵役に就き、復員後は東京都技手、建築課に勤務している。進駐軍家族住宅用家具の設計に携わりつつ、日本童画会にも入会した。50年代にはデザイングループKAK結成したほか、東京都のプラスチック技術養成に参加した。1960年代には日本産業デザイン振興会事業委員として全国へデザイン指導に赴くとともに、学習研究社の教材にも着手するなど精力的な活動を展開した。1970年代に入って、会議によるデザインの必要を考えはじめ、グループモノ・モノを開始、木工塾やショールームを兼ねたショップも誕生させる。以後、東北工業大学意匠学科教授や共立女子大学家政学部教授など後進の育成に努めつつ、1997年に逝去した。

秋岡の経歴においては、デザイン全般へ向けた広範な活動が顕著であるものの、住宅や建築分野については散見されるにとどまる。とはいえ、生活デザイン全般に住まいは位置づけられるほか、敗戦直後のスタートが東京都の建築課に勤務していることも確認できる。

また、晩年の活動拠点であった「ドマ工房」は、秋岡のすまい観の実践として見なすこともできよう。かねてより「工房住宅」や「工房生活」を提唱してきた秋岡は、実際に自邸の増改築に夢中になりながら、アトリエとギャラリーを併設した「ドマ工房」を建設する。1階のドマ工房には土足のまま入り込めることから、その名がつけられたとされる。

なお、建物の設計は秋岡自身が手がけている。仕事場でもあり寛ぐ場所でもあり、また談笑する場でもある空間は、木工作業台や版画プレス機、仕事机、暖炉などに囲まれている。ここにみられる、寛ぐ空間ともものづくりが隣接した場としての住まいは、秋岡のものづくり思想において、住まいがどのような位置づけにあるかを示唆している。

また、先述したように秋岡は旺盛な執筆活動を展開したことで知られる。著作は1968年に出版した児童向け読み物『建築の発明発見物語：住まいの始まりから未来都市まで』にはじまり、1974年に出版された警世の書『割りばしから車まで』や、自身の工房づくりに端を発した『工房生活のすすめ』、そして没後の1999年に出版された『木のある生活』に至るまで、生活デザインに関する評論から、木工技術のテキストまで幅広いジャンルを手がけた。雑誌に寄稿した小文を含めれば膨大な量となる。

表1 秋岡芳夫略年譜

西暦	事項
1920年	熊本県に誕生
1941年	東京高等工芸学校木材工芸科を卒業 東京都建築局学校営繕課に技手として就職
1942年	熊本において兵役
1945年	敗戦、復員後、東京都技手、建築課に勤務
1946年	進駐軍家族住宅用家具設計デザイン（ディペンデント・ハウス）に参画 日本童画会入会 初山滋に師事
1951年	内川芳子と結婚
1953年	KAK 結成
1954年	長男誕生
1955年	長女誕生
1956年	東京都のプラスチック技術養成に参加
1957年	JIDA 理事をつとめる
1958年	KAK の新しい事務所が完成、次男誕生
1959年	KAK 第5回毎日産業デザイン賞受賞
1964年	学習研究社の教材に着手
1967年	FD 中小企業デザイン機構
1968年	著書『建築の発明発見物語』出版
1969年	KAK を離れ中野に事務所を構える
1970年	「会議によるデザインの必要」を考える
1971年	FD で木工塾がスタート
1972年	ショールームを兼ねたショップ誕生
1974年	通産省伝統的工芸品産業審議会委員
1975年	国井喜太郎産業工芸賞受賞
1976年	1100人の会が発足
1977年	東北工業大学意匠学科教授に就任
1977年	著書『住すまう』『木しらき』『創つくる』出版
1978年	第三生産技術研究室を創設
1979年	有限会社モノ・モノ設立
1979年	著書『工房生活のすすめ』出版
1980年	自宅にドマ工房開設
1982年	北海道立近代美術館『箱で考える一遊びの箱展』 共立女子大学家政学部教授
1984年	著書『暮しのためのデザイン』出版
1987年	目黒区芸術文化振興財団評議員（～91年）
1988年	著書『暮しのリ・デザイン』出版
1989年	著書『新和風のすすめ』出版
1991年	「モノの図書館」構想を北海道置戸町に提示
1993年	中学校美術科（木材工芸）の実技指導（～96年）
1994年	北海道置戸町に「どま工房」が開設
1996年	妻芳子とイタリア旅行 国際手遊協会（HA協会）の設立を提案
1997年	逝去
1999年	著書『木のある生活』出版

表2 秋岡芳夫の著書にみられる住まい関連言及

No.	書名	出版社	出版年	言及
1	建築の発明発見物語 住まいの始まりから未来都市まで	日本ライトハウス点字出版社	1968	○
2	割ばしから車まで	柏樹社	1971	
3	デザインとは何かー伝統美と現代	講談社	1974	
4	木工道具の仕立	美術出版社	1976	
5	木 しらき	玉川大学出版部	1977	○
6	住 すまう	玉川大学出版部	1977	◎
7	創 つくる	玉川大学出版部	1977	○
8	日本の手道具	創元社	1977	
9	工房生活のすすめ	みずうみ書房	1979	◎
10	木と漆	文化出版局	1980	
11	木工と道具	三麗社	1981	
12	漆と漆のモノ	三麗社	1981	
13	食事とうつわ	三麗社	1981	
14	あそびの木箱	淡交社	1982	
15	伝統的工芸品とデザイン	伝統的工芸品産業振興協会	1982	
16	学研の図鑑	学習研究社	1982	
17	日本の技1	集英社	1983	
18	日本の技7	集英社	1983	
19	いいもの ほしいもの	新潮社	1984	
20	暮しのためのデザイン	新潮社	1984	◎
21	竹とんぼからの発想	講談社	1986	
22	暮らしのリ・デザイン	玉川大学出版部	1986	○
23	木工入門樹の器	講談社	1986	
24	食器の買い方選び方	新潮社	1987	
25	新和風のすすめ	佼成出版社	1989	○
26	木工-指物技法	美術出版社	1993	
27	玉川こども・きょういく百科[19](えとこうさく)	玉川大学出版部	1998	
28	玉川こども・きょういく百科[29](ひ)	玉川大学出版部	1998	
29	玉川こども・きょういく百科[27](つち)	玉川大学出版部	1998	
30	木のある生活	ティビーエス・ブリタニカ	1999	○

表注: 住まいに関する言及があるものについて、章や節を設けているものを◎、文章の一部において言及されているものを○とした。

4. 秋岡の著書にみられる住まい関連言説

秋岡が数多く残した著書において、何度も繰り返される主張は、機械的で画一的なデザインに対する批判である。「工業技術、工業材料によるモノの量産は使い捨てを前提としてしか成り立たない」、「家の量産量費」と「画一化」に僕は猛烈に反対だ」と断言し⁵⁾、「機械のように、科学的に作るのは結構ですけど、機械的に、型で、画一的に作るのは困ります。住宅は、住むものの心の容れ物でもあるからですから」⁶⁾として、銘々がそれぞれの住まいに生きることを推奨する。

同様の視点から、生活に何が大事なのかを考え、生活において大事なことを実現できる住まいの在り方についても言及がみられ、その例として「一室多用」が挙げられている。現在の LDK もまた多目的な一室であるとはしながらも、日本古来の「たたむ伝統」が生かされていないと指摘し、ステレオタイプにとらわれずに、生活に合致させることの重要性を説いている。

こうした視点から導出されるのが、借家への懐疑である。『ウチ』は家族みんなの成長につれて、都度成長してこそ、『ホンモノウチ』なので、増改築不可の借家な

どように、いれものが中身を拘束する『ウチ』なんて、僕にはとても考えられない」とする⁷⁾。

上記にみるような住まい観ゆえに、住宅産業の動向に対しても徹底した批判を行っている。「工業が技術と資本にモノをいわせ住宅を作ろうとしている。車を作ったときと同じ発想、同じ工業材料、同じ技術でこんどは家を量産する計画を立てている」ゆえに、「マイホームはいずれマイカーと同じ短命の商品」となって、住宅が使い捨てになると警鐘を鳴らす⁸⁾。ゆえに秋岡は「建売率7割制限」という提案を行っている。

「建売率7割制限」の住宅という考えはどうだろう。(中略)従来の建坪率、環境保全がねらいの敷地に対する建坪率を真似た造語だが、たとえ建売住宅といえどもめいめいで個別であるべきだから画一的に作ってはならぬと規制し、未完成品で家を売りなさいという案である。⁹⁾

「七十パーセントだけは工場生産」し、「残りの三十パーセントは住み手と町の大工の勝手に」させると言うこの提案には、秋岡の住まい観が如実にあらわれている。

5. 「悪魔の住居学」にみられる住まい観

秋岡は1980年に創刊された雑誌『ダイヤモンド・ボックス』にて、全9ページに及ぶ記事「悪魔の住居学」を監修している¹⁰⁾。

イスの高さに脚を合わせる、部屋の広さに動きを合わせる。便利さの追求が、人間性をむしろばんできた。「悪魔の住む」住居……これは人間サイズの快適空間にするためのアイデア集。¹¹⁾

こう銘打って、表3に掲げる24項目について、住居設計上の勘所を反面教師的にまとめている。

この記事では、人体を無視した規格寸法や、生活に適応できていない家具配置、無駄の多い空間利用、健康を害する内装材やインテリア計画等、多方面にわたる具体例を挙げながら、現代住宅に「悪魔」が棲む状況を批判した内容となっている。ここでも一貫しているのが、人間の特性に配慮しているかどうか、生活感覚に対応した住空間になっているかどうかをなによりも重視する姿勢といえるだろう。

6. おわりに

以上、工業デザイナーである秋岡芳夫が数多く残した著書の読解により、彼のものづくり思想にみられる独特な住まい観を明らかにした。

秋岡の住まい観を特徴づけるものとして、①機械的な画一的な量産型デザインへの懐疑、②銘々の生活体験に根ざした住まいの尊重、③生活重視を実現する「一室多用」の重視、④増改築できない借家への懐疑、⑤住宅産業の動向に対する批判などが挙げられる。

秋岡が残した広範な領域での業績を眺めると、工業デザインから竹トンボに至るまで、自ら手を動かすものづくりがもたらす喜びや価値を大切にすることがわかる。彼のものづくり思想を土台にした住まい観は、主として1970年代から80年代にかけて精力的に発表してきた著書を通して明確に伝わってくる。戦後急激に成長した住宅産業において、技術と資本の力により住宅の姿が大きく変えられていった状況に直面し、「マイホームはいずれマイカーと同じ短命の商品」になると警鐘を鳴らした秋岡の思いは、スマートハウスが全盛を迎えている昨今の住宅業界の状況を考えると、あらためて問い直すべき問題を数多く含んでいるといえよう。

なお、本稿では主に秋岡の著書を対象として、彼の住まい観について読解を進めたが、数多くなしたデザイン提案や、自宅にほどこされた増改築の変遷についても考察を進めることで、より総合的に秋岡の業績を再評価する視点を獲得することが今後の課題である。

表3 「悪魔の住居学」の24項目

- | |
|-----------------------------------|
| (1) 規格サイズ(定尺)のベニヤ板が動きにくい部屋をつくっている |
| (2) 一日の四五分のためにLDKでの生活が制約されている |
| (3) 食卓の肘掛け椅子が休息を妨げている |
| (4) ヘンな税法が家具の置き場所を限定している |
| (5) 狭い“頭”が部屋をますます狭くする |
| (6) 窓を閉ざした子ども部屋は子どもの発育を妨げる |
| (7) 壁に向かった机は発想を広げない |
| (8) 右袖の机は仕事や勉強の能率を低下させる |
| (9) 明るすぎる照明が心の豊かさを損なう |
| (10) 黒っぽい天井は寿命を縮める |
| (11) 赤い色の部屋は血圧を高くする |
| (12) 天井の低い家に育った子どもは夢も想像力も貧困 |
| (13) 室内の“生活音”が音楽鑑賞能力を鈍くする |
| (14) Pタイルの床は子どもの勉強を妨げる |
| (15) マンションの壁は人間の肌をいためる |
| (16) 冷暖房にも狂わない家具が生活の質感を狂わせている |
| (17) Pタイルの床は子どもの皮膚感覚をマヒさせている |
| (18) 毛の長いじゅうたんの生活が足の“個性”なくしている |
| (19) 靴でする散歩は足の裏の美意識をすりへらす |
| (20) 夏に涼しく、冬に暖かいもてなしは客を喜ばせない |
| (21) 大型家具は生活に不便さを強めている |
| (22) JIS規格には“生活感覚”に対して無神経なものがある |
| (23) トイレの勝手な解釈が生活を不便にする |
| (24) マンションのドアが日本人の“優しさ”を奪っている |

注および参考文献

- 1) 河内聡子「立ちどまった工業デザイナー」秋岡芳夫の理念と活動—高度経済成長期の工業デザインの課題を背景として考える—、東北工業大学紀要：理工学編・人文社会科学編、43号、pp.35-49、2023.3
- 2) 新莊泰子『秋岡芳夫とグループモノ・モノの10年：あるデザイン運動の歴史』、玉川大学出版部、1980
- 3) 目黒区美術館『DOMA 秋岡芳夫 モノへの思想と関係のデザイン』、目黒区美術館、2011
- 4) 前掲書『DOMA 秋岡芳夫 モノへの思想と関係のデザイン』所収の年譜を参照した。
- 5) 秋岡芳夫『住 すまう』、玉川大学出版部、1977、p.116
- 6) 同前、p.78。あるいは「住まいも入歯のように本来なら、大工に託えて、個別に、個人別々の暮らしに合わせて作るべき」といった発言のみられる（『木のある生活』、TBSブリタニカ、1999、p.174）。
- 7) 同前、pp.113-114。秋岡自身、自らの手で頻りに自宅の増改築を行っており、秋岡欧は「日常茶飯事の模様替え（といっても父自作の家具類を移動するだけでも大仕事なのだが）にはじまり、時には一夜で二間あったはずの部屋の壁がぶち抜かれて多くなりビングになっていたり、そしていざ大工さんに依頼するような増改築を思いついたら、とにかく納得するまで自ら図面を引きまくる」と回想している（コロナブックス編集部編『作家の住まい』、平凡社、pp.72-73）。
- 8) 前掲書『住 すまう』、p.115
- 9) 同前、p.115
- 10) 秋岡芳夫監修「悪魔の住居学」、『月刊ダイヤモンド・ボックス』、創刊号所収、1980.4、pp.110-119
- 11) 同前、p.110

図版出典

図1 前掲書『DOMA 秋岡芳夫 モノへの思想と関係のデザイン』

資料1 『住 すまう』にみられる住まい関連言及

【1】機械のように、科学的に作るのは結構ですけど、機械的に、型で、画一的に作るのは困ります。住宅は、住むものの心の容器でもあるからです。住まいはめいめいでありたいもの。(p. 78)

【2】住まいはむかしながらがいいのです。昼間の街の生活が都市化し、工業化し、合理化し能率本位なものになればなるほど、夜の住まいのはむしろ反対に、むかしながらを保つ必要があります。ぼくらの暮らしの心情はいまもむかしもあいかわずだからです。穴居時代のようにうすぼんやりとみんなの顔を照らすあかり。たき火のようなあたたかい色のあかりの光。むかしむかしの洞窟時代の原体験が離れがたく、ぼくらの心の片隅にいまも潜んでいるせいでしょうか、住まいのあかりはむかしながらがいいのです。囲炉裏のあかりのような、あかあかとした「点のあかり」が一番夜の住まいにふさわしい。(p. 81)

【3】一室多用と言えば現在のLDKも多目的な一室。一室多用をねらった部屋ですが、まだLDKには「たたむ伝統」が生かされていないように思います。南むきのスペースに応接セットなり、リビング用の家具なりを置き、中程には食器戸棚と食卓そして椅子などのダイニングセット。そして北むきにキッチン。冷蔵庫・ステレオ・テレビなどが加わって現代の一室多用のLDKは、家具だらけ。(p. 86)

【4】たたみの部屋は夜具から食卓まで、たたむことで狭いけれども広く使いました。しかしLDKは、広いけども手狭です。(p. 87)

【5】「これからの日本のLDK用のテーブル」は西欧直輸入のダイニングテーブルやティーテーブルではなくてこれからのLDK中心の生活にマッチした「ワンルームのワンテーブル」が是非欲しい。LDKのまんなかになら、どっかと据えて、そこで食事、テレビ、アイロンがけ、そしてお客さま出来る。そんな万能のテーブルが欲しいと思いませんか。(p. 92)

【6】考えて見たら靴を履いて食事する国の食卓と、脱いで食事をする習慣のぼくらの国の食卓や食堂椅子が、全く同じ高さであっていいはずがありません。でもなぜ高すぎる椅子テーブルが売れているのでしょうか？もしかしたら家具を買う時にハイヒールを履いたまま描け心地をためして買う女性がいるんじゃないかしら。(p. 92)

【7】LDKと油の蒸気。LDKと家電製品の騒音。一部屋で、リビングとダイニングキッチンを兼ねるのは一見妙案のようだけど、建築構造にも、建材の用い方にも、そして住まい方にも、まだまだ工夫の余地が一杯。(p. 95)

【8】『静かな住まいの伝統』を、現代のぼくらの暮らしは受継いでいません。気がついていないのかも。静かな住まいの有難さを。(p. 96)

【9】お互いに軒を接して住んで見ると、お隣さんのクーラーのお尻が、こちらの居間の真正面に見えたりすることがあります。

むし暑い夏の一日、目の前で隣のクーラーの騒音、うるさくて窓が開けられないなんてこともあります。かと思うと、狭い露地でムツとするような排気をクーラーに吹きつけられて不愉快な思いをすることもしばしば。クーラーの使用者が「裏」だと思っている側が、実は通行人やお隣さんにとっては「表」なのです。ですから、裏のデザインや排気音や排気処理に、もっともっと神経を使ってほしいものです。

クーラーは、コミュニティの道具としてまだまだ不完全ですが、近頃、排気音の大変低いクーラーも出廻り始めました。隣近所や通行人のことも考えて、裏から出る音の静かなクーラーを探し出して買うことがこれからの豊かな暮らしのデザインと言えるでしょう。暮らしのデザイナーは、もちろんあなた。(p. 101)

【10】ぼくらは来る日も来る日も猛烈な量の水を消費しつづけています。水を、文字通り湯水のごとく使っているのです。でも、あれは天然の水ではなくて、加工した人工の水なのです。山の水、川の水、雨の水をやっとかき集めて貯めて、浄水した加工水なのです。飲料水なのです。それをトイレに使っている。いま大都会では地下水が枯渇しはじめています。地盤沈下現象で、それが証明されています。もう開発する水資源も乏しい。それほど遠くない将来、いや近々、オイルショックをうわまわる水ショックがやって来ます。家庭の節水がいま絶対必要。まずはトイレの水洗に飲料水を使うのを止め、出来ることならジェット、新幹線なみの水循環方式のトイレに急ぎ改めるべきです。(p. 106)

【11】焼けあとの取片づけに多額の賃金のかかるような造りの家、塗家はご法度(天保年間まで)と、経済のことだけを考えて焼家に規制してあった徳川中期の住まいと、いざと言うとき、タンスもテレビも持ち出さない現代の高層化した住まいと、さて一体どちらの住まいがどうなのでしょう。家を建てるときの経済だけを優先させている点で両者は共通しています。そして住むものもいざと言うときのことはあきらめて暮らしている点も昔とちつとも変わっていません。住まいの構造を、いざという時に生活用具を持ち出せるよう、改められないでしょうか。それとも家も家財も捨て、身一つで難をさけるのが、これからの利口な都市生活なのでしょう。(p. 111)

【12】現代の車ダンス—自家用車でみんなが一斉に逃げようとしても車に引火でもしたら？現代の車ダンスはまだ非常の際の使用を禁止されていないのです。(p. 111)

【13】『ウチ』は家族みんなの成長につれて、都度成長してこそ、『ホンモノウチ』なので、増改築不可の借家などように、いれものが中身を拘束する『ウチ』なんて、僕にはとても考えられない。(pp. 113-114)

【14】こんどはその工業が技術と資本にモノをいわせ住宅を作ろうとしている。車を作ったときと同じ発想、同じ工業材料、同じ技術でこんどは家を量産する計画を立てている。良い面が表裏一体できっと出てくる。『家が安くなる、住宅不足が解消す

る』が予測できるいい面で、『住宅が使い捨て、いや住み捨てモノになる。』が悪い面の予測だ。(p. 115)

【15】工業技術、工業材料によるモノの量産は使い捨てを前提としてしか成り立たない。

「家の量産量費」と「画一化」に僕は猛烈に反対だ。(p. 116)

【16】日本もいずれ住宅を数年で住み捨てる習慣の国になるだろう。住宅の寿命—耐用年数が車並みに必ずなる。ならぬとメーカーは成り立たぬ。そうなるように、技術を開発する。(p. 119)

【17】これからの建築空間の諸装置は、内部から建物の命数を縮めて行くだろう。そしてマイホームはいずれマイカーと同じ短命の商品になるだろう。(p. 120)

【18】では、そんな短命な『商品住宅』で、一体ぼくらはどんな暮らしをすることになるのか。象徴的に言うなら『霊園のない団地住まい』になるだろう。もし入居者が一生その団地に住みつくつもりなら、団地内に霊園があってあたり前だが、仮住まいのつもりでそこに入居し、また、どうせ仮住まい用なんだとたかをくくって計画するからか、団地には霊園がない。どんなちっぽけな村にも、墓所がある。墓所があって、しっかりしたコミュニティがあった。今の団地には、両方、ない。霊園がなくとも、コミュニティがなくとも、人間は死ぬ時が来れば死ぬ。(pp. 120-121)

【19】万年道具をオートメーションで量産することは、工業の自己矛盾だ。霊園付きの団地に一生涯住まわれたら住宅産業は成り立たない。アメリカ式の団地ごとの住み捨てこそ住宅産業の願いなのだろうが、だが一体、住宅とはぼくら生活者にとって本質的には何なのか。(p. 123)

【20】かつて家は、買うものではなくてめいめいに建てるものだった。個性的に、創作して住むものだった。人間の家は小鳥の巣と違い一生の道具だった。だが、現在の工業は、家をめいめいに作れない。一生の道具にも作れない。技術的には作れても、経済がそれを許さない。(p. 124)

【21】大工が、建具職などの職方と一緒にこれからもぼくらの町に、これまでのように住み続けてくれることを前提に、「建売率7割制限」の住宅という考えはどうだろう。聞きなれぬはず、建売率なる言葉は、ぼくの造語。従来の建坪率、環境保全がねらいの敷地に対する建坪率を真似た造語だが、たとえ建売住宅といえどもめいめいで個別であるべきだから画一的に作ってはならぬと規制し、未完成品で家を売ちなさいという案がある。七十パーセントだけは工場生産してよらしい。残りの三十パーセントは住み手と町の大工の勝手にさせなさいと言うわけ。いかがであろう、この案。住宅のイージーオーダー方式と言ってもいい。(p. 125)

資料2 『木のある生活』にみられる住まい関連言及

【22】拳に正常な皮膚感覚を育てるのには、赤ん坊の時代には

わせることが必要なのでしょうか。

赤ん坊が喜んでほうかはわぬか。実際にはわせてみましたら、畳の部屋ではうれしそうにはった子が、プラスチックの床の部屋でははいたがりませんでした。

住まいの床はお座敷犬向きのがいいのでしょうか。それとも赤ん坊好みの床のほうがいいのでしょうか。(p. 20)

【23】今の日本人は住まいの床を三つもっているとさえいえます。

玄関・ベランダのような靴を履いて使う土足の床と、居間のようなスリッパで暮らす準土足の床と、畳の部屋のような素足の部屋の三つの床を。この三つの床のうちで伝統的な「座」の機能をもった床は畳の床だけです。(p. 27)

【24】今のLDK。リビングとダイニングとキッチン兼ねる一部屋ですから、さしずめ現代版の茶の間といったところ。一室で居間、食堂、台所を兼ねるねらいは、昔の茶の間そのままですけれど、さて部屋の中に置いてある家具にどれだけのたたむ伝統が活かされているのでしょうか。

せいぜい一〜二脚の折畳椅子とバタフライ型のダイニングテーブルがたためるくらいで、あとの家具はぜんぶ折畳めません。いつもそんな家具が部屋を占領していて、手狭なのが今のLDKなのです。(p. 29)

【25】一部屋を茶の間、仕事部屋(裁縫)、食堂と使い分けた昔の一室多用の知恵をテーブルに応用し、一机多用な食事、裁縫、読書、お茶、そして仲間とゆっくり一杯やるのにも便利なテーブルに、その高さを工夫し直したらどうでしょう。うまく工夫した一机多用のテーブル一つだけで暮らせば、LDKは広々とした一室多用の部屋に機能するかもしれません。

一つのテーブルでお茶も楽しみたい、親しい仲間とゆっくり一杯やりたい、そして、食事を家族そろって楽しくやろうと、そう思うなら、テーブルの脚を短くしたらいいんです。(p. 30)

【26】一個でもいい、部屋から家具を取除く。取除くためにはまずダイニングテーブルを一机多用に工夫し直す。そうすることが日本の住まいの伝統を受け継ぐことになると思います。(p. 32)

【27】よく大は小を兼ねるといいますが、椅子の座の高は低を兼ねません。男寸法の椅子には女は座れませんが低は高を兼ねます。低目の女の椅子に男は十分座れるのです。家庭用の椅子の座高はぜひ女寸法にしたいものです。(p. 35)

【28】休息、軽作業、食事に兼用できる椅子、リビングダイニングチェアの具備すべき要件はまず素足やスリッパ向きに低めであること。座が広くていろいろな姿勢で座れること。ハイバックでないこと。肘がないこと、となります。(p. 36)

【29】現在の桐ダンスの一段は、中身が空の場合ですと女一人で軽々と持てます。中に衣類が入っている場合でも、二人なら持ち運ぶことができます。女一人で持てる重い物の限界は二〇キロだといわれていますが、桐ダンスにはそんなデータも考慮

にいて、女ものにふさわしく「重量デザイン」がしてあります。といわけで、三段重ねの桐ダンスは、「女もの」なのです。(p. 42)

【30】お盆やお膳に、女のモノサシで測ってほぼ一尺幅のものが多いのは、女たちが持ちやすくて運びやすいようにお盆・お膳を、女のモノサシで測って選んだからだろうと思います。

ちなみに、靴を脱いで使う女の椅子の座の高さも、鯨尺で測ってほぼ一尺です。横座りふうに腰掛けたときに肘をもたれるのにも具合のいい椅子の背の女向きの高さもまた、女のモノサシでほぼ一尺なのです。(p. 53)

【31】住まいも入歯のように本来なら、大工に誂えて、個別に、個人別々の暮らしに合わせて作るべきですが、最近では既製品の建売住宅が増えていきます。住まいを自動車のように、画一的に作っていいのでしょうか。住まいは土地土地で風土別に、個人個人個別に、大工の手作りで作るべきだと思います。(p. 174)

【32】民芸品と呼んで今なお多くの人々に愛され続けている一連のかつての生活道具の「民芸品の用と美」は、使い手の生産参加のつみ重ね、ユーザーデザインの結晶なのです。不特定の、「使い手のデザイナー」の数々のデザインがあつた用と美作りにあづかっていたことは見逃せません。(p. 178)

【33】男と女の箸を性別にデザインしたのは、誰なのでしょう。作り手の工夫なのでしょう。使い手の誂えだったのかもしれませんが。あるいは使い手が買い物の際に選別した結果なのかもしれません。要するに、使い手の「買い物のデザイン」の結果だろうと思います。(p. 178)

【34】住まいもおおかた、建てて住む家から買って住む家が変わってしまいましたので、注文の家に住むことはなかなか困難になってきました。プレハブ住宅など、工場生産する建物、建具、建材が増えたからです。手作りの技術を持った大工さんが少なくなったからです。手作りの良さは誂えの利く良さだということをもみんなが忘れかけているからです。

家も、着るものも、食器も、その用と美を誂えて、個性的に暮らしたいとは思いませんか。(p. 179)

資料3 『暮らしのためのデザイン』にみられる住まい関連言及

【35】昔の住まいは、日本人の身度尺で測ってあつたから。住みやすかつた。

むかしの畳と座布団は日本人が寝るのに必要なほぼ 3×6 尺に、ふすまは座布団を出し入れするのに合わせて布団と同寸に、いずれも日本人の体に合わせて作つてあつたが、いまの建物、とくに団地サイズの住宅は日本人の身度尺を無視して建ててしまったから、押し入れのふすまの幅が狭かつたりして座布団を横むきにしないと入らなかつたりする。

いまのくらしは、モノのほうを小さくしないと暮らせない。

狭い食卓、小さな食器、小さなお盆が必要ないのだが、座布団まで小さくできない。身のまわりのものをもう一度、体で測り直して見る必要がある。(p. 15)

【36】このごろ、住まいの窓は「閉じるためのもの」に変わってしまったらしい。ゆくゆく鍵もレールもついていない「開かずの窓」になるだろうか。

ぼくは窓を開けて住みたい。春と夏には窓に腰を下ろして街でも眺めたい。(p. 44)

【37】里ものはそれぞれの町でお互いの生活のために作るもの。土地柄があつて、誂えても思いのほか安くつくもの。流通経費のかからぬ商品。

住まいは、その作りを北海道では冬暖かに、沖縄では夏涼しく、風土別に、その広さや間取りは建て主の家族数や好みに合わせて個々別々に建てないと、住みにくい。これまでの住まいが産地生産でなく「里生産」だったのは、町で建てた方が産地生産するよりも風土別・個別に建てられるからだが、昨今大メーカーが住宅の量産を手がけるようになった。これからの住まいが風土性・個別性のないものにならないだろうか。心配だ。(p. 122)

【38】床をプラスチックタイルにしたのは失敗でした。掃除が木よりも楽になるだろう。床からの隙間風もなくなるだろう。傷んで古びることもなからう。そう考えて貼り替えたんですが、その結果、冬は冷たいし夏は南に面した出入口附近の床は陽ざしでちんちんに焼けて素足では歩けないし、いま掃除をしたあとなのにすぐまた埃が表面に浮いて、足の裏がざらつくし、拭き掃除のあとに水気がのこってべたつくし……。 (p. 155)

【39】かつての窓は雨と風と泥棒と埃を遮ってくれればそれで用は足りた。でもいまは加えて、ガス・スモッグ・騒音もシャットアウトしなければならぬ。閉めっ放しにする必要がある。そもそも窓とは閉じるための機能かそれとも開けるためのものなのかといった議論に関係なく、窓はいま閉じるためのものになりつつあるのです。(p. 161)

【40】つまり日本のかつての住まいには、建物(窓)と家具(文机)と暖房器具(長火鉢)の寸法に、いま計画されている住宅内部 JIS と同じ考えのモジュールがあつたのです。建物も家具も生産の都合よりも生活の都合を優先させて作られていました。「生活尺」で割り出した部屋・家具でしたからとても暮らしやすく使いやすかつたのです。(p. 192)

日本の都市における四季期間の変化に関する研究

A study on the change in the duration of the four seasons in Japanese cities

堀越 哲美*

Tetsumi HORIKOSHI

The objective of this report is to clarify the seasonal change trends over a relatively long period of time. To this end, seasonal indices were established and the temperature fluctuations per half-ten were examined in five Japanese cities. Interannual fluctuations from 1946 to 2024 showed an increasing trend in the number of half-ten summer months. In winter, Sapporo and Toyama showed a continuous decrease, while other cities showed a significant decrease around 1970 and have stabilized since 1990. In spring and autumn, an extremely gradual decrease was observed. In each city, a significant increase and decrease in the summer and winter periods and interannual fluctuations in the start and end times of spring and autumn were revealed. As trends in spring and autumn, a gradual decrease in the period and changes in the start and end times were observed. It has become clear that the situation of the four seasons may be changing.

Keywords : Four seasons, Air temperature, Interannual fluctuation, Global warming,

Urban heating

四季, 気温, 経年変動, 半旬, 温暖化, 都市暑熱化

1. はじめに

近年、日本の都市は温暖化傾向とともに夏季の猛暑を含む暑熱化を示している。著者ら(堀越 2023, 2024)は、気温階級別日数および WBG_T を用いて、長期にわたる日本の都市とリゾートについて暑熱化傾向および猛暑環境の変化傾向を示した。そこでは、季節の状況の変化には言及しておらず、季節の状況や変化について必ずしも十分に把握されていない。

関連する季節に関する先行研究としては、吉野(1968)は、気圧配置型の出現頻度から季節区分を行い、その後再検討(吉野 1977)を 1941 年からの 35 年間について行っている。その際、気候要素の検討も札幌、新潟、東京、鹿児島について行った。1 年を 14 季節に区分した。これを受け、山川(1988)は、同様に 1941 年からの 45 年間において、冬・春・梅雨・夏・秋雨・秋の 6 季節に区分した。これで長期変化傾向については述べられていない。

三上(1983)は、古日記に記載された天候記事を基に、天明の飢饉前後の 1780 年代を対象に、全国の天候推移と自然季節の特性を明らかにする研究を行った。開始・

終了期、期間などにおいて、現在と有意な差異は認められないとするも変動幅は大きいとしている。東村(1992)は、日本の 17 地点について 1811 年から 1840 年の自然季節の復元を行い 1960 年から 1989 年の平均状態と比較した。梅雨期と初冬の開始が遅れたことが見出された。

河村(1994)は、生物季節による季節区分の研究を行い自然季節との比較を行なっている。その結果、生物季節が冬と盛春が短く、梅雨、初夏の始まり、晩秋の終わりは一致し、初秋の始まりが遅いことが示された。長期変化は扱っていない。高橋(2009)は 1979 年から 2007 年の前線分布型から日本の季節進行の特徴を求めた。その結果、初夏から梅雨期前半(5月下旬から6月下旬)は季節進行が2半旬ほど早まり、秋雨(9月上旬から10月中旬)は開始が2~3半旬ほど遅くなっていることを見出したが、長期変化傾向は示されていない。

岩本(2019)は、東京について、冬・春・初夏・夏・晩夏・秋の6季節として、統計モデルを用いて気温季節によって1964年から2013年までの検討を行った。その結果、気圧配置による区分と異なることを示し、さらに東京の季節構造が変化していることを示した。

*愛知産業大学造形学研究所 研究員・工博

Researcher, Institute of Architecture and Design, Aichi Sangyo Univ., Dr. Eng.

以上より、先行研究では季節の長期的変化傾向を近年の夏季暑熱化が著しい期間を含めて、その状況は必ずしも提示されていないと考えられる。そこで本研究は、気候要素として気温を取り上げ、その各年の年間変化に着目し、比較的長期を対象として四季の変化傾向を明らかにすることを目的として行った。

2. 方法

気象庁気象データの1946年から2024年までの日平均気温、日最高気温、日最低気温を用いる指標を設定し、計数を行い基礎データとした。季節としては、春夏秋冬の四季とし単純化するために梅雨は取り上げなかった。指標としては、気温階級別日数として用いられる夏日(日最高気温 $\geq 25^{\circ}\text{C}$)と冬日(日最低気温 $< 0^{\circ}\text{C}$)をそれぞれ季節としての夏と冬に該当すると設定した。春と秋は、中間日の指標を設定し、日最高気温が夏日の境界 25°C 以下で、日最低気温が暖房不要とされる 10°C 以上である日とした。中間日は、7月以前に出現した場合を春日、8月以降に出現した場合を秋日とした。以上のデータと指標により、春日、夏日、秋日、冬日(以後春、夏、秋、冬と呼ぶ)の日数を計数した。これらの条件を満たさない日は計数していない。緩衝日と捉えた。対象都市としては、地理的分布を考慮し、おおよその傾向を把握するため札幌、東京、富山、大阪、鹿児島とした。

データのまとめ方としては、各指標日の開始時期と終了時期の決定、半旬(5日)毎にその間に指標日が何日出現しているか否か(半旬該当日数と呼ぶ)による検討を行った。すなわち、該当半旬の半旬数(期間)の経年変化、年間の半旬該当日数の変化による季節の出現状況、指標の開始時期と終了時期の経年変化について求め、検討を行った。

3. 結果および考察

3.1 春、夏、秋、冬の経年変動

図1から図5に、札幌、東京、富山、大阪、鹿児島市の1946年から2024年の春、夏、秋、冬の半旬数の変動を示す。

図1の札幌では、冬は経年的下降傾向が顕著である。春と秋では緩やかに上昇している傾向が見られる。夏は1946年から1982年ぐらいまでは若干の下降傾向があるが、それ以降には上昇傾向に転じている。

図2の東京では、春と秋は、2000年付近までは緩やかな上昇が見られるが、2006年を過ぎると若干の緩やかな下降傾向が示される。夏は、1991年付近まではほぼ一定であるが、1994年以降上昇が見られる。冬は、下降傾向が1990年まで続き、それ以降2014年付近まで半旬数が5以下となるが、以降は半旬数5から10となる。2014年12月に東京管区気象台の露場が、大手町から北の丸

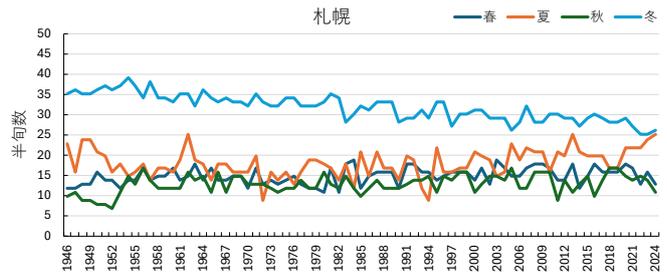


図1 1946年から2024年までの経年変動：札幌

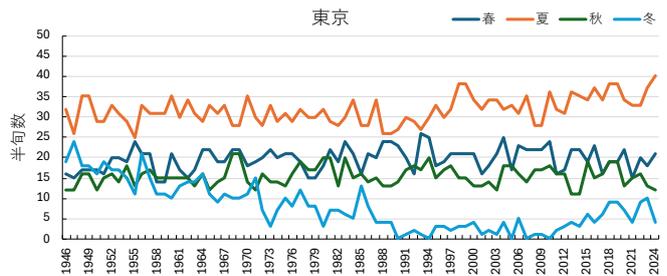


図2 1946年から2024年までの経年変動：東京

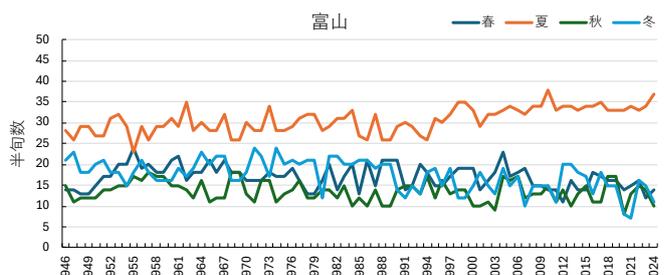


図3 1946年から2024年までの経年変動：富山

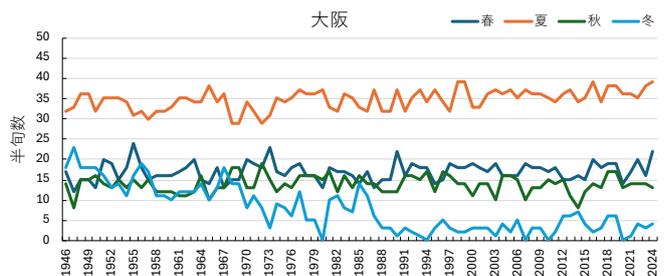


図4 1946年から2024年までの経年変動：大阪

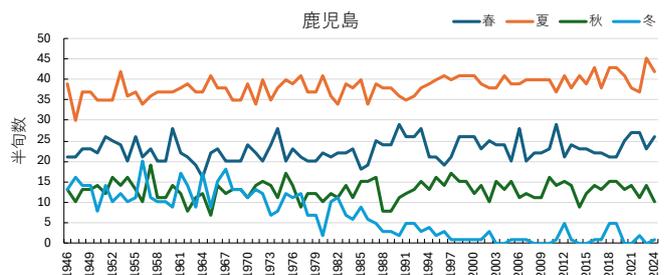


図5 1946年から2024年までの経年変動：鹿児島

公園へ移転し、月平均気温、日最高気温の月平均値、日最低気温の月平均値のみ補正されている¹⁾。新平年値は旧平年値に比べて、日最低気温の年平均値は 1.4℃、年平均気温は 0.9℃、日最高気温の年平均値は 0.2℃それぞれ低くなるとしている。この冬の上昇は、日別気温が補正されていないのでその影響が出たものと考えられる(観測部 2016)。

図 3 の富山では、1946 年から 1956 年まで、春と秋は上昇が見られるが、その後緩やかに減少している。冬についても全期間で緩やかな減少傾向である。夏は、1993 年までは半月数 30 付近でほぼ一定に推移しているが、1994 年以降は上昇に転じ半月数 35 付近に達している。

図 4 の大阪では、春と秋は半月数 15 付近を上下してほぼ一定に推移している。冬は、1969 年頃までは緩やかな減少を示していたが、以降急な下降を示すが、1980 年台前半は半月数 10 に上昇する。その後は一部を除き、半月数 5 程度以下を示している。

図 5 の鹿児島では、夏は緩やかな上昇を示し、1940 年代後半の半月数 35 が 2020 年代では平均 40 となっている。1947 年の低下は、8 月の欠測の影響である。春と秋は顕著な変化傾向は見られない。春は、半月数 20 から 25 で推移するが、秋は 10 から 15 であり、両者に差が見られる。これは、上述の 4 都市と大きく異なる点である。冬は、1970 年まではほぼ一定であったが、以降 1990 年まで急速に減少し、以降は半月数 5 以下である。

5 都市の経年的推移から、その変動状況は異なるが、夏については、1990 年から 2000 年以降は上昇傾向が示されている。これは、都市の暑熱化とともに日本付近の温暖化による作用によると推察される。冬についても、札幌と富山では連続的な減少傾向が、他都市では 1970 年代以降に減少傾向が見られ、1990 年付近より半月数 5 程度以下と極めて少ない半月数となる。暑熱化・温暖化の影響が夏と冬に現れていると判断される。春と夏については、富山については冬と同様の漸減傾向が見られ、四季の期間的变化が現れていると考えられる。さらに、札幌、東京、富山、大阪については、春と秋の出現半月数はほぼ同程度であるのに対し、鹿児島では春が秋よりも長い期間であることが示されている。これは、南日本に位置する都市であることの特性であると推察される。

3.2 2001 年以降の経年変動

上述のように、経年推移から 1990 年から 2000 年以降に比較的大きな変動が見られたことが明らかになったので、2001 年以降の 5 都市の四季の変動について検討する。図 6 から図 10 に、春・夏・秋・冬の 2001 年から 2024 年の半月数の変動を示す。それぞれに直線(線形)回帰式と決定係数を記している。

図 6 の札幌の経年変動では、夏は 0.16 [半月/年] の増加傾向で、冬は -0.13 [半月/年] の減少傾向である。春と

秋は、それぞれ -0.05 [半月/年] と -0.01 [半月/年] の極めて緩やかな減少傾向である。したがって、夏期間の増加と冬期間の減少が相補的と考えられる。

図 7 の東京の経年変動では、夏は 0.22 [半月/年] の顕著な増加傾向を示す。春と秋は、それぞれ -0.058 [半月/年] と -0.017 [半月/年] の極めて緩やかな減少傾向である。冬は 0.32 [半月/年] の増加傾向であるが、2014 年 12 月の露場移転を考慮すると、2015 年以降はそれ以前とは異なる状況を示していると考えられ、ほぼ変化が小さいと解釈される。

図 8 の富山では、夏は 0.11 [半月/年] の増加、春と冬がそれぞれ -0.14 [半月/年] と -0.15 [半月/年] の減少傾向である。秋はほぼ一定である。

図 9 の大阪では、全ての季節で 0.08 [半月/年] 以下の緩やかな増加傾向である。

図 10 の鹿児島では、夏は 0.12 [半月/年] の増加傾向が示され、春も 0.05 [半月/年] の緩やかな増加傾向であるが、秋と冬はほとんど変化が見られない。

札幌と富山は、夏の上昇傾向が経年的に続き、冬は緩やかな減少傾向が続いている。春と秋は、極めて緩やかな減少あるいはほぼ変化が見られない状況である。大阪と鹿児島は、夏は従来からの上昇傾向がまだまだ続くのに対し、冬は 1990 年付近までに顕著な下降があり、その後は半月数 5 以下の低い値の安定状態になったと考えられる。これは、2015 年以降を除く東京の冬の傾向とも一致する。

3.3 半月数と日数との比較

2001 年以降の半月数の経年変動と四季の日数との比較を行った。半月の場合は、5 日間に 1 日以上該当日があれば計数しており、日数で見た場合との傾向把握の違いを検討した。上述までの結果を参考に、代表事例とし

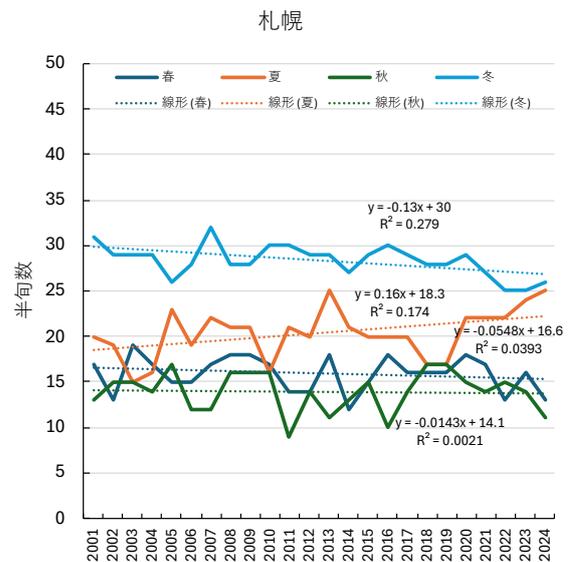


図 6 2001 年以降の半月数の経年変動：札幌

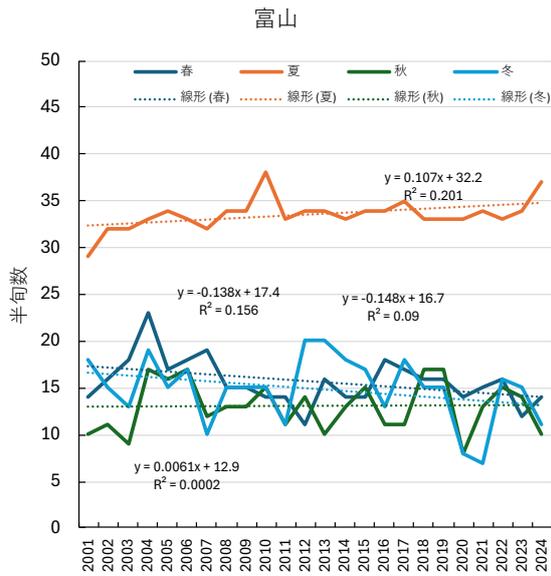


図7 2001年以降の半旬数の経年変動：富山

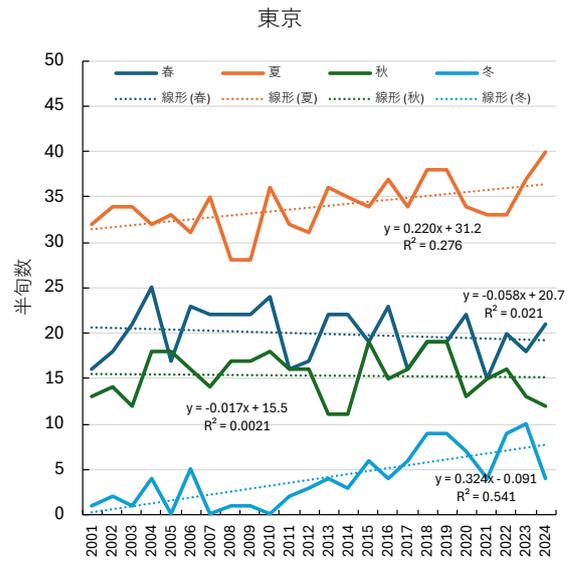


図8 2001年以降の半旬数の経年変動：東京

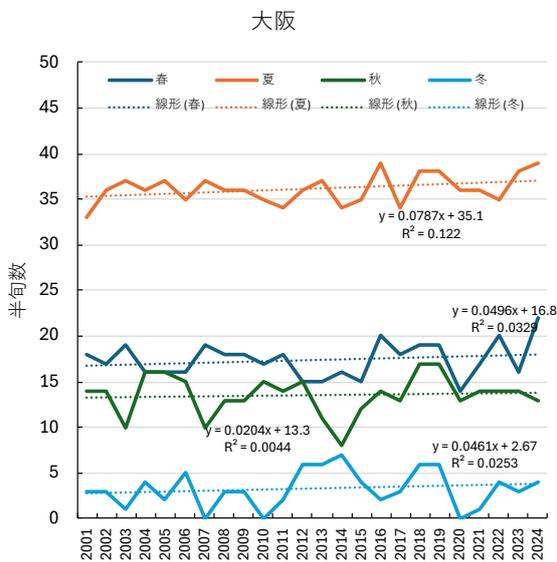


図9 2001年以降の半旬数の経年変動：大阪

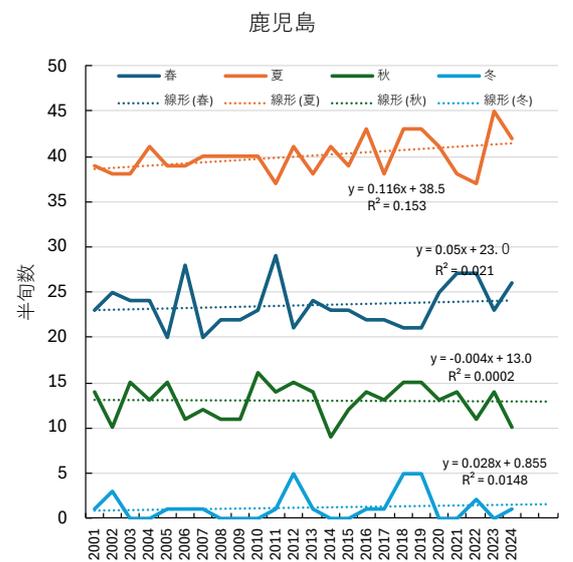


図10 2001年以降の半旬数の経年変動：鹿児島

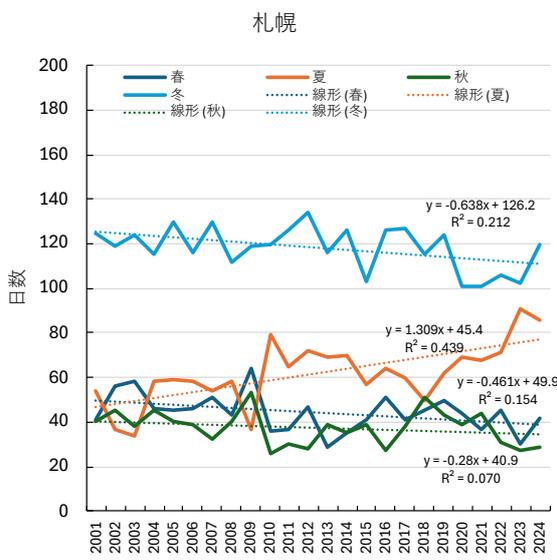


図11 2001年以降の日数の経年変動：札幌

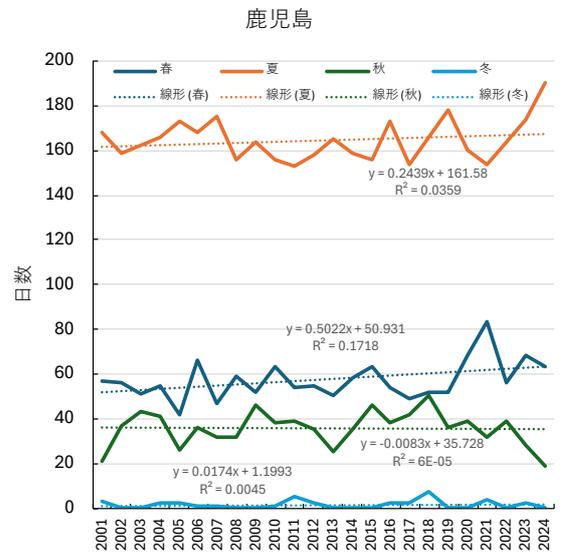


図12 2001年以降の日数の経年変動：鹿児島

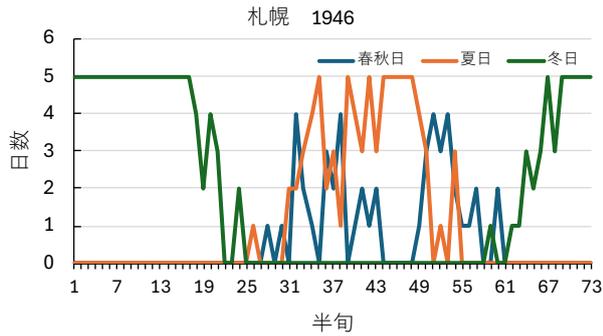


図 13 1946年の半旬該当日数の変動：札幌

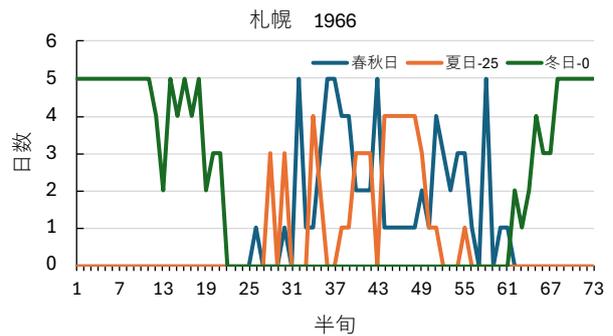


図 14 1966年の半旬該当日数の変動：札幌

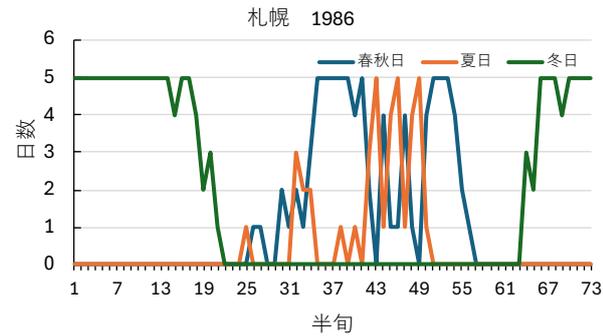


図 15 1986年の半旬該当日数の変動：札幌

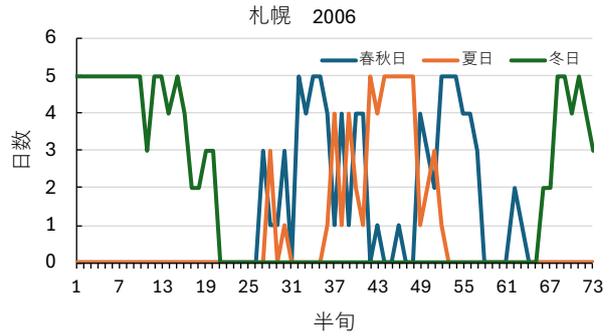


図 16 2006年の半旬該当日数の変動：札幌

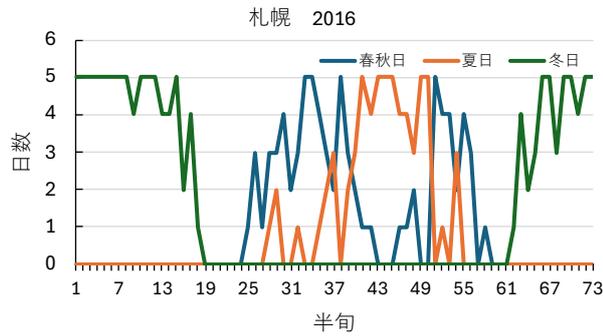


図 17 2016年の半旬該当日数の変動：札幌

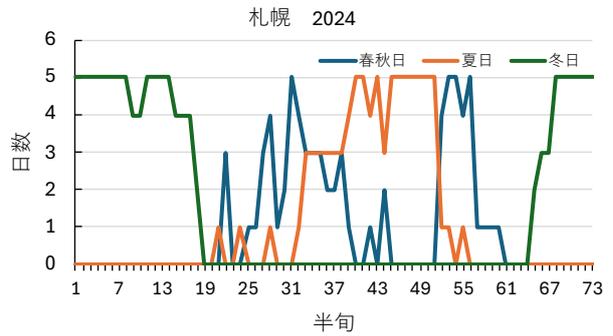


図 18 2024年の半旬該当日数の変動：札幌

て夏は共通して増加傾向で冬に減少傾向を示す札幌と冬はほぼ少なく一定であった鹿児島を取り上げる。

札幌の場合を図 11 に示す。夏の顕著な増加傾向と冬の減少傾向が示されている。正負の違いはあるが、変化割合は夏の方が冬よりも大きく、これは半旬数の場合と同様である。春と秋は、日数の場合もほぼ等しく緩やかな減少傾向を示し、半旬数の場合と同様の傾向である。

鹿児島の場合を図 12 に示す。夏は他季節に比べて日数が多いのは、半旬数の場合と同様である。冬の低い値で推移する様相は、日数と半旬数で同様の傾向である。春の極めて緩やかな上昇と秋のほぼ変動なしの状況も一致している。半旬数による経年変動の傾向分析は、日数による場合とその特性記述は相違がないと考えられる。

3.4 半旬数の年間へ移動の経年推移

半旬数による年間の変動について、その経年変化を検討する。代表例として札幌と鹿児島を取り上げ、1946年から20年毎の2016年までと2024年について年間の半旬毎の春、夏、秋、冬の半旬該当日数をまとめた図を作成した。

図 13 から図 18 に札幌の場合を示す。冬の日数については、1月から4月にかけての半旬に5日が連続する期間が減少している傾向が見られる。11月から12月にはその出現期間が減少とともに開始半旬が遅くなっている。春秋については、1946年では5日の出現はないが、経年に従い出現し始める。出現期間が2024年では第22半旬から第60半旬までとなり長期化している。温暖化傾向が現れていると考えられる。

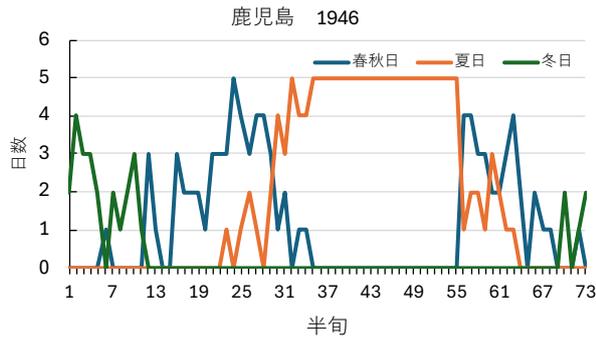


図 19 1946 年の半旬該当日数の変動：鹿児島

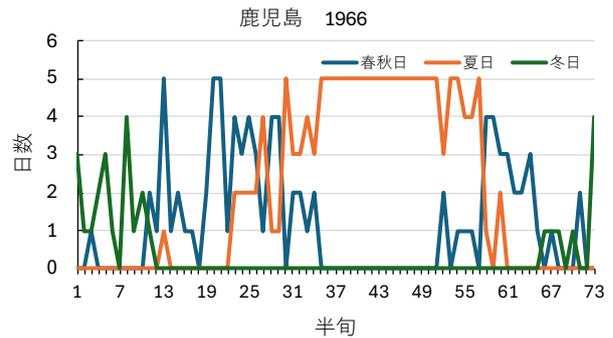


図 20 1966 年の半旬該当日数の変動：鹿児島

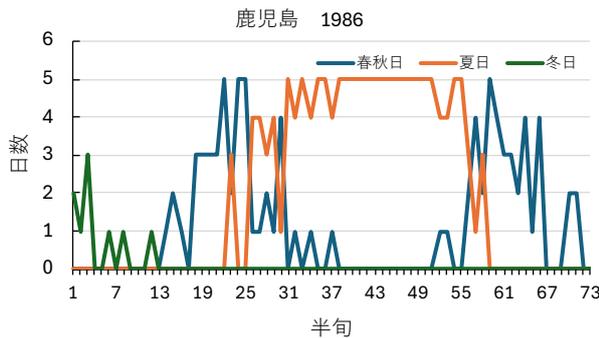


図 21 1986 年の半旬該当日数の変動：鹿児島

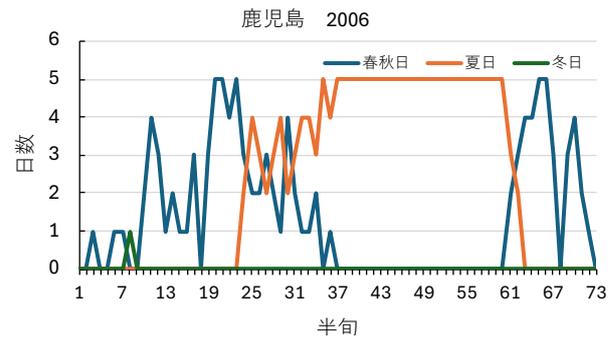


図 22 2006 年の半旬該当日数の変動：鹿児島

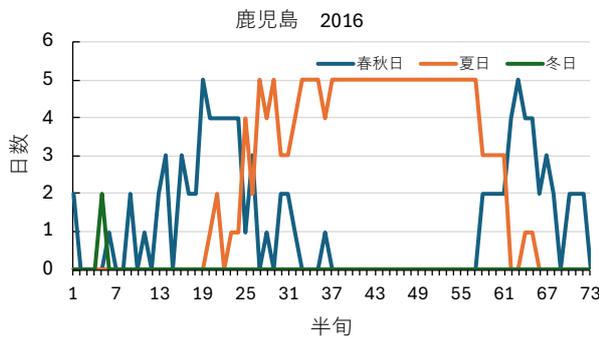


図 23 2016 年の半旬該当日数の変動：鹿児島

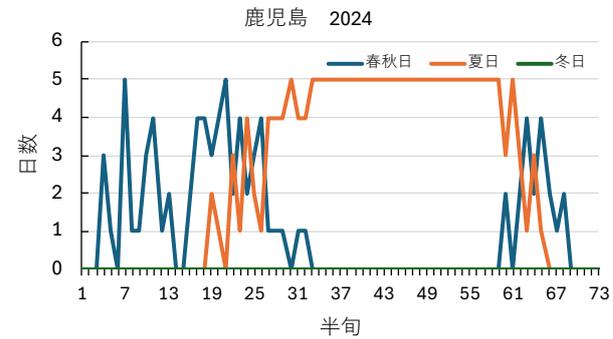


図 24 2024 年の半旬該当日数の変動：鹿児島

図 18 から図 23 に鹿児島の場合を示す。中間日の春秋の半旬で 4 日以上半旬該当日数の出現についてみると、1946 年では、第 23 半旬から第 63 半旬までの期間であった。2024 年では第 7 半旬から第 65 半旬までであり、その間 1986 年には開始が第 30 半旬になる場合もあった。夏は、出現期間が若干長期化し、半旬で 5 日が連続する日数が増加している。最も顕著な傾向は、冬である。1 月から 4 月までの冬の出現は 1986 年までは半旬該当日数 3 日であったが、それ以後は 2 日以下である。11 月以降の出現は 2006 年以降には見られない。さらに 2024 年には 1 月から 4 月までも見られなくなった。冬の減少と夏の増加、春と秋の出現時期の変動が見られ、季節推移の変化が現れたものと判断される。

4. まとめ

本研究の目的は、比較的長期を対象として季節(四季)の変化傾向を明らかにすることである。そのため気候要素として気温の半旬の変動を取り上げ、夏日・冬日・中間日(日最低気温 $\geq 10^{\circ}\text{C}$ かつ日最高気温 $\leq 25^{\circ}\text{C}$ とし期間で春日・秋日に分ける)を計数しデータとした。日本の 5 都市について、1946 年から 2024 年にわたる各年の半旬毎のデータによる年間変化について検討を行い、以下の知見が得られた。

1946 年から 2024 年の春、夏、秋、冬の半旬数の経年変動では、夏の半旬数の増加傾向が見出され、札幌・大阪では連続的増加、東京・富山・鹿児島では 1990 年から 2000 年以降の顕著な増加となり、地域的な差が現れ

た。冬については、減少傾向が明瞭で、札幌・富山では連続的な減少、それ以外の都市では 1970 年付近からの顕著な減少があり、1990 年以降は低い値で安定して傾向を示した。春と秋は、極めて緩やかな減少ないし安定した状態が見出された。

2001 年以降の春、夏、秋、冬の半旬数の変動を詳細に観察したところ、いずれの都市でも下記は増加傾向が顕著であり、札幌と富山で冬季の減少傾向が明瞭であった。春と秋には長期的傾向と同様に極めて緩やかな減少ないし安定した状態であることが示された。半旬数に代えて日数でも検討したところ、同様の傾向が明らかとなった。

半旬数による年間の変動について、半旬内に現れる春、夏、秋、冬の日数（半旬該当日数）により、その経年変化と開始時期・終了時期と期間について検討した。各都市において、経年的に冬の期間の顕著な減少と開始終了時期の変動が明らかとなった。夏については冬と対照的に期間の増加と開始時期と終了時期がそれぞれ前進と後退する傾向が顕著であった。

以上より、気温の階級別日数で言われてきた、猛暑日・真夏日・夏日の増加および冬日の減少と同様に、本研究の分析でも夏の増加、冬の減少傾向が見られた。しかし、そのみでは必ずしも明瞭ではなかった春と秋の傾向として、緩やかな減少傾向がある期間の場合とそれぞれの開始時期・終了時期の変化が見られ、四季の状況が変化してきている可能性が明らかになったと考えられる。

参考文献

- 1) 堀越哲美(2023): 気温の階級別日数の長期変化傾向から見た温暖化と都市化の日本の都市への影響, 愛知産業大学造形学研究所報 19, 30-38
- 2) 堀越哲美、兼子朋也、近藤恵美、渡邊慎一、加藤里実、今西貴美(2024): 都市と避暑地における WBGT の日出現時間数と日積算温度による夏季暑熱環境の評価 -2014 年と 2023 年の比較-, 第 48 回人間-生活環境系シンポジウム報告集、99-102
- 3) 岩本英之、沖大幹(2019): 東京における気温季節区分と長期変動、水文・水資源学会誌 32(4)、182-188
- 4) 河村武、川村磨美、朴(小野)恵淑(1994): 日本の生物季節と自然季節、愛知産業大学紀要造形学部 2、47-50
- 観測部(2016): 地上気象観測点「東京」の露場移転について(その 2 平年値の更新について)、測候時報 83、7-32
- 5) 三上岳彦(1983): 日本における 1780 年代暖候期の天候推移と自然季節区分、地学雑誌 92(2)、33-43
- 6) 高橋信人(2009): 前線分布でみた季節進行とその近年における傾向、天気 56(9)、3-16
- 7) 東村康文(1992): 19 世紀前半における日本の自然季節の長短と季節進行、地理学評論 65A(8)、619-634
- 8) 山川修治(1988): 東アジアにおける卓越気圧配置型の季節推移からみた近年の気候変動、地理学評論 61A(5)、381-403
- 9) 吉野正敏(1968): 「気候学」、地人書館
- 10) 吉野正敏、甲斐啓子(1977): 日本の季節区分と各季節の特徴、地理学評論 50(11)、635-651

注

1) <https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/temp/correction.html> 参照

教育活動

建築学科

- 第 65回全国大学・高専卒業設計展示会(日本建築学会・各支部共通事業 主催)(学生出展)
2024年 5月15日(水)～2023年 12月7日(日)
会場:全国30カ所巡回

- 第 23 回(2024 年度)愛知産業大学 建築コンペティション(主催)
A 部門「水を活かす」をテーマにした建築提案
B 部門「建築家作品の鉛筆描きによるトレース」
2024 年 10 月 12 日(土)(二次審査会および表彰式)
会場:愛知産業大学 4101 製図室

- 第 24回学生フォーラム
岡崎市 7 大学の学生による研究発表・展示
2024年11月30日(土)13:00～17:30
会場:人間環境大学

- 令和 6 年度 東海地区建築教育研究会研究協議会(協力)
建築学科教員による講義、学内施設見学、意見交換
2024 年 1 月 24 日(火)12:10～16:30
会場:愛知産業大学

- 愛知産業大学+工業高校連携レクチャー2024(主催)
建築学科教員による愛知県工業高等学校生徒対象の建築講義
2024 年 9 月 9 日(月)、10 月 7 日(月)、11 月 11 日(月)
会場:Zoom(オンライン)

- 建築系愛知 17 大学共同企画展 2024
合同講評会・設計競技公開審査
2024 年 12 月 7 日(土)13:00～18:30
会場:名古屋都市センター11 階
名古屋都市再生 2024 にぎわいに続く、中川運河の新たな到達点 設計競技出品 ポスター展示
2024 年 12 月 3 日(火)～12 月 20 日(金)
会場:名古屋都市センター11 階まちづくり広場

スマートデザイン学科

- 岡崎市観光協会との包括協定にもとづく具体的取り組み (学生制作)

さくらピンバッジ令和6年バージョンのデザイン提供

2024年3月22日(金)発売

岡崎市内各所で販売開始

○JA あいち三河との包括協定にもとづく具体的取り組み (学生制作)

岡崎市農林産物ブランド化推進品目ぶどう PR リーフレットのイラストレーション提供

2024年4月発行

岡崎市内各所で配布開始

○岡崎産ワイン「葵の雫」ラベルデザイン(学生制作)

岡崎市経済振興部農務課の依頼によるデザイン提供

2024年7月26日(金)発売

○第5回(2024年度) 愛知産業大学 スマートデザイン学科 高校生デザインコンテスト (主催)

生成 AI によるイメージの創造 「20年後、私たちの暮らしはこうかわる」

2024年10月12日(土) (表彰式および発表会)

会場:愛知産業大学4号館 4301教室

通信教育部建築学科

○愛知産業大学通信教育部造形学部建築学科 建築卒業研究展[名古屋展]

2024年2月22日(木)~2月28日(水)

会場:愛知産業大学名古屋スクーリング会場 れんが橋 STUDIO B1F

○愛知産業大学通信教育部造形学部建築学科 建築卒業研究 公開講評会

2024年2月24日(土)

会場:愛知産業大学名古屋スクーリング会場 れんが橋 STUDIO B1F

○愛知産業大学通信教育部造形学部建築学科 建築卒業研究展[福岡展]

2024年3月14日(木)~3月19日(火)

会場:福岡アジア美術館 交流ギャラリー 8F

○愛知産業大学通信教育部造形学部建築学科 建築卒業研究展[東京展]

2024年3月29日(金) ~3月31日(日)

会場:愛知産業大学 東京スクーリング会場 4F

○第65回全国大学・高専卒業設計展示会(日本建築学会・各支部共通事業)(学生出展)

2024年5月15日(水)~2024年12月7日(土)

会場:全国30カ所巡回

○第47回学生設計優秀作品展－建築・都市・環境－(学生設計優秀作品展組織委員会・レモン画翠 主催)(学生出展)

2024年8月26日(月)～2024年8月29日(木)

○建築系愛知17大学共同企画展2024(建築系愛知17大学共同企画展実行委員会 主催)(学生出展)

2024年12月3日(火)～12月20日(金)

会場:名古屋都市センター11階まちづくり広場

建築学専攻

○地域クリエイション領域

GAO XIAOYU, 日光東照宮の建造物彩色と北京故宮の建築彩画に関する考察

○建築デザイン領域

YANG SHINING, 神宮前商店街再生の提案

○建築イノベーション領域

YANG MINZHE, 中国人留学生の多樣的越境を最大限に活かす～要望に合わせた住空間の提案～

○マネジメント領域

REN YIAN, 企業の持続可能性における組織文化についての研究—大規模長寿企業の事例にみる持続要件—

デザイン学専攻

○コミュニケーションデザイン領域

CHEN RUNDONG, ゲームキャラクターデザインに関する研究

CHEN YIJIN, 脱構築主義に基づくイラスト制作

CHU TIANYI, インスタレーションによる臨場感を向上する研究と制作

HU ZHIYUAN, メディアアートにおける「サウンドスケープ」の可視化研究

HUANG WENXUAN, 印鑑による感情を表現する

SHENG QING, 古詩を平面表現として視覚化する研究

SUN QIHENG, 五感をデザインするための研究～中国茶のブランディングデザイン～

川越 涼, 犯行現場の写真と特徴を与えたgpt-4oを用いた犯罪予測に基づく防犯マップ作成手法の提案

高田陽進, ユーザのカメラテクニックを向上させるエキスパートシステム用の自動アドバイス作成手法

長尾亜怜, 自動対話を用いたコンテンツ作品におけるキャラクターの闇落ち変異過程表現手法 ～自動対話作品としての罪と罰の主人公再現～

平井孝幸, ユーザーが求めるテラーメイドキャラクターの設計と特徴抽出手法の提案

○プロダクトデザイン領域

CHENG YONGJIE, プロダクト開発における画像生成 AI 活用方法の研究

HU YUANZE, 公共の喫煙室におけるプライバシー保護を重視した設計の研究

LYU BAOKUN, 外国人観光用タクシーのデザイン

建築学科

高木清江(研究代表者)

2023-2026 年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成)基盤研究(C)(一般)
こどもの成育への影響よりみた高層階居住環境の評価構造記述モデルに関する研究
1,430,000 円(2024 年度)

寺嶋利治(研究分担者)

科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成)基盤研究(B)(一般)
景観調和と CI の両立を見据えた認知心理的アプローチによる色彩デザインロジックの研究
572,000 円(2024 年度)

スマートデザイン学科

西村雅史(研究代表者)

2021-2024 年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成)挑戦的研究(開拓)
多元的センサー情報に基づく食行動研究基盤の構築
7,670,000 円(2024 年度)

杉山奈生子(研究代表者)

2021-2024 年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成)基盤研究(C)(一般)
アントワヌ・ヴァトーの雅宴画とピュグマリオン神話～描かれた彫像を中心に～
778,181 円(2024 年度)

廣瀬伸行(研究代表者)

2022-2024 年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成)基盤研究(C)(一般)
学習者個別の特性と学習状況から学習支援を個別最適化する対話エージェントの開発
1,040,000 円(2024 年度)

通信教育部建築学科

藤枝秀樹(研究代表者)

2022-2026 年度 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成)基盤研究(C)(一般)
BIM を使った建築設計エスキスプロセスの開発についての研究
130,000 円(2024 年度)

増田忠史(研究代表者)

2023-2025 年度 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成)基盤研究(C)(一般)

オブジェクト VR を利用した遠隔・非同期での建築教育ツールの開発についての研究
780,000 円(2024 年度)

堀部篤樹(研究分担者)

2023-2026 年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成)基盤研究(C)(一般)

学校図書館の空間整備と運営改善を図る総合的研究

200,000 円(2024 年度)

造形学研究所長・教授 新井 勇治

愛知産業大学造形学研究所(以下、「研究所」という)は、「造形学に関する理論並びに実際を研究し、併せて地域文化の進歩向上に貢献すること」(愛知産業大学造形学研究所規程—以下、「規程」という—第2条)を目的として、平成16年4月に愛知産業大学内に設置されました。「所員」は、愛知産業大学及び愛知産業大学短期大学の専任教員のほか、学部の非常勤講師など、目的に賛同しかつ研究所が認めた者で構成されます。このほかに、本学大学院を修了した者や所長が特に認めた者を「研究員」とすることができます。

また、研究所の事業は、規程第3条に次のように定められており、造形学部(通学課程)、通信教育部造形学部、及び大学院造形学研究科が一体となって、キャンパス内外で積極的に展開しています。

- (1)造形学に関する研究ならびに調査
 - ア. 教員に対する研究助成
 - イ. 研究成果、調査資料の普及発表及び研究所報の刊行等
- (2)研究会、報告会、講習会、講演会、公開講座等の開催
- (3)研究資料の収集・整理及び保管
- (4)国内、国外の研究機関との連絡並びに情報交換
- (5)その他必要な事項

造形学研究所報 第21号

2025年3月31日発行

発行 愛知産業大学造形学研究所
所長 新井 勇治
〒444-0005 愛知県岡崎市岡町原山12-5
TEL 0564-48-4511/FAX 0564-48-7756
<http://www.asu.ac.jp>

編集 新井 勇治
今西 貴美
林 羊齒代
増田 忠史
計屋 昭生

表紙デザイン 宮下 浩

造形学研究所報

二〇二五年
二十一号

ISSN 2188-577X

AICHI SANGYO UNIVERSITY

愛知産業大学
造形学部